宮崎市文化財調査報告書　第82集

下北方塚原第２遺跡

自治公民館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１１

宮崎市教育委員会

宮崎市文化財調査報告書 第82集

下北方塚原第2遺跡　正誤表

頁	行	誤	正
11	31	カマド崩落土状	カマド崩落土上
45	9	瑳、	水注と思われるもの、
45	36	中央の柱堀方	図上右側の柱堀方
50	5・9・13	第37図	第38図
56	20	瑳	水注？
66	20	企画性	規格性
67	4	地域の地域であり	地域であり

宮崎市文化財調査報告書　第82集

下北方塚原第２遺跡

しもきたかたつかばるだいにいせき

自治公民館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１１

宮 崎 市 教 育 委 員 会

序　文

本書は、自治公民館建設に伴い平成 21 年度に実施された、下北方塚原第２遺跡発掘調査の報告書です。

下北方塚原第２遺跡は市街地北西部の下北方台地に所在する遺跡です。下北方台地は、今回調査をおこなった下北方塚原第２遺跡のほかにも、県指定史跡の下北方古墳群、弥生時代の大遺跡である下郷遺跡など大変多くの遺跡が存在する地域です。まさに、台地全体が遺跡といってよい場所であり、現在は台地のほぼ全体を「下北方遺跡群」として、文化財の保護に努めております。

今回調査をおこなった下北方塚原第２遺跡からは、奈良時代から平安時代の建物跡や溝の跡などを中心とした人々の生活の痕跡が数多く見つかっています。これらの調査成果は、この地が古代寺院の跡であった可能性を示すものであり、非常に重要な成果であったと言えます。

本書は、この調査成果をまとめたものであり、宮崎の歴史、文化を知っていただくため、市民の皆様に広く活用いただき、そのご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

また、今回の調査では、現地における発掘調査成果の説明会を市民の皆様に向けて実施することができました。今後もこうした活動をとおして、より多くの皆様に郷土の歴史や文化財について知っていただけるような機会を設けていきたいと考えております。

宮崎市教育委員会
教育長　二見俊一

例　言

1　本書は、宮崎市教育委員会が平成 21 年度に実施した下北方塚原第２遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は平成 21 年５月 14 日から平成 21 年７月 25 日までの期間実施した。整理作業は平成 22 年１月 12 日から平成 22 年３月 29 日、及び平成 22 年５月 17 日から平成 22 年９月８日の期間実施した。

3　調査組織

調査主体　　宮崎市教育委員会

現地調査			整理作業		
総括	文化財課長	永井　淳生	総括	文化財課長	田村　泰彦
	副主幹兼埋蔵文化財係長	富永　英典		副主幹兼埋蔵文化財係長	富永　英典
事務	主　　査	松崎　留美	事務	主　　事	戸髙　佑輔
担当	技　　師	西嶋　剛広	担当	技　　師	西嶋　剛広
	嘱　　託	鈴木　弘子		嘱　　託	庄境　美紀
	嘱　　託	島井　伸幸		嘱　　託	菊池　ひろみ

4　本書の執筆、編集は西嶋がおこなった。

5　掲載した図面のうち、現場における実測は西嶋、鈴木、島井が現場作業員等の協力を得ておこなった。遺物の実測は西嶋、庄境、菊池が整理作業員の協力を得ておこなった。

6　現場の写真撮影は西嶋、島井が、出土遺物の写真撮影は西嶋がおこなった。

7　現地調査、整理作業の際に以下の方々からご指導ご助言を賜った（50 音順、敬称略）。
小田富士雄、坂上康雄、柴田博子、長直信、坪根伸也、比嘉えりか、藤木聡、柳沢一男

8　本書の図で示す方位記号はすべて真北を示す。

9　本書で使用する遺構略号は以下のとおりである。
住居跡：SA　　掘立柱建物：SB　　土坑：SC　　溝状遺構：SE　　ピット：SH

10　本調査における出土遺物、実測図、撮影写真などはすべて宮崎市教育委員会で保管している。これら資料の有効な活用を望む。

本　文　目　次

第Ⅰ章　遺跡周辺の環境
　第１節　地理的環境……1
　第２節　歴史的環境……1
　第３節　宮崎市域の主要古代遺跡……5

第Ⅱ章　調査に至る経緯と調査の経過
　第１節　調査に至る経緯……9
　第２節　調査の経過……9

第Ⅲ章　調査の成果
　第１節　調査成果の概要……11
　第２節　古代以前の遺構と遺物……11
　第３節　古代の遺構と遺物……19
　第４節　古代以降の遺構と遺物……52
　第５節　遺構外出土遺物……52

第Ⅳ章　考察
　第１節　瓦にかんして……59
　第２節　大型堀立柱建物の性格……64

第Ⅴ章　まとめ
　第１節　調査成果のまとめ……67
　第２節　展望と課題……68

挿　図　目　次

第１図　周辺の遺跡……3
第２図　調査地位置図……4
第３図　宮崎市主要古代遺跡分布図……8
第４図　調査区配置図……9
第５図　遺構配置図……12
第６図　竪穴住居跡１……13
第７図　竪穴住居跡１出土遺物（１）……14
第８図　竪穴住居跡１出土遺物（２）……15
第９図　竪穴住居跡２、同出土遺物……17
第10図　竪穴住居跡２出土遺物……18
第11図　土坑１……18
第12図　掘立柱建物１出土遺物……20
第13図　掘立柱建物１……21～22
第14図　掘立柱建物２柱掘方部分……23～24
第15図　掘立柱建物２柱掘方（１）……25
第16図　掘立柱建物２柱掘方（２）……26
第17図　掘立柱建物２・北側溝遺物出土状況……27
第18図　掘立柱建物２北側溝出土遺物（１）……28
第19図　掘立柱建物２北側溝出土遺物（２）……29
第20図　掘立柱建物２北側溝出土遺物（３）……30
第21図　掘立柱建物２北側溝出土遺物（４）……31
第22図　掘立柱建物２北側溝出土遺物（５）……32
第23図　掘立柱建物２北側溝出土遺物（６）……33
第24図　掘立柱建物２北側溝出土遺物（７）……34
第25図　掘立柱建物２北側溝出土遺物（８）……35
第26図　掘立柱建物２北側溝出土遺物（９）……36
第27図　掘立柱建物２西側溝出土遺物（１）……37
第28図　掘立柱建物２西側溝出土遺物（２）……38
第29図　掘立柱建物２西側溝出土遺物（３）、掘立柱建物２出土石器……39
第30図　掘立柱建物２柱掘方出土遺物（１）……40
第31図　掘立柱建物２柱掘方出土遺物（２）……41
第32図　掘立柱建物２柱掘方出土遺物（３）……42
第33図　掘立柱建物２柱掘方出土遺物（４）……43
第34図　掘立柱建物２柱掘方出土遺物（５）……44
第35図　柱列１・２、同出土遺物……46
第36図　溝状遺構１……47
第37図　土坑２・３・４・５、同出土遺物……48
第38図　土坑６・７・８・９、同出土遺物……49
第39図　ピット出土遺物……51
第40図　溝状遺構２、同出土遺物……52
第41図　遺構外出土遺物……53
第42図　軒丸瓦製作工程模式図……62
第43図　掘立柱建物１・２位置図……65

表　目　次

第１表　出土石器観察表 …… 54
第２表　出土土器観察表（１）…… 55
第３表　出土土器観察表（２）…… 56
第４表　出土瓦観察表（１）…… 57
第５表　出土瓦観察表（２）…… 58
第６表　平瓦・丸瓦製作技法分類表…… 60

図　版　目　次

図版 1　調査地全景…… 70
図版 2　住居跡１…… 71
図版 3　住居跡２、土坑１…… 72
図版 4　掘立柱建物１（１）…… 73
図版 5　掘立柱建物１（２）…… 74
図版 6　掘立柱建物２（１）…… 75
図版 7　掘立柱建物２（２）…… 76
図版 8　掘立柱建物２（３）…… 77
図版 9　土坑（１）…… 78
図版 10　土坑（２）、溝状遺構…… 79
図版 11　住居跡１・２出土遺物 …… 80
図版 12　掘立柱建物２出土遺物 …… 81
図版 13　本遺跡出土瓦…… 82
図版 14　軒丸瓦 …… 83
図版 15　平瓦・丸瓦格子目各類 …… 84
図版 16　瓦の製作にかかわる痕跡 …… 85
図版 17　各遺構出土遺物 …… 86

第Ⅰ章　遺跡周辺の環境

第１節　地理的環境（第１，２図）

下北方塚原第２遺跡は宮崎市街地北西部の台地上、下北方町塚原に位置する。台地は、平和台公園がある越ヶ迫丘陵から南に向かって派生する標高約 20mから 30mの台地で、地名を冠して下北方台地と通称されている。台地は、宮崎層群を基盤とし、その上位に火山灰層が堆積しており、台地上はほぼ平坦な地形をなしている。現在は台地全体の宅地化が進む住宅密集地である。また、埋め立て、及び、溜池によってその地形を留めていないが、台地西部には台地を分割するように開析谷が存在していた。

宮崎平野部には都城盆地に源を発し、都城盆地、宮崎平野を貫流し、太平洋へと注ぐ大淀川が流れている。大淀川は宮崎平野部において幾度か流れの向きを変えるが、遺跡の所在する下北方台地西側は、大淀川が東から南へと流れを変える地点にあたる。

また、下北方台地からは、南部に広がる宮崎市街地を一望でき、西には遠く霧島連山を望むこともできる眺望の地でもある。調査地はこの台地中心に位置する場所であり、「王路の坂」といわれる坂から続き、台地を南北に貫く道の突き当たり部分にあたる。現在は平景清伝説の残る景清廟、下北方地区の公民館として利用されている。

第２節　歴史的環境

宮崎市域には多数の遺跡が存在する。中でも台地上や海岸沿いに発達した４列の砂丘・砂堤列上に集中して見られる傾向がある。下北方台地もこうした遺跡密集地の一つであり、その密度は市内でも随一の高さである。現在は台地上の大部分を一括して「下北方遺跡群」と呼称している。

「下北方遺跡群」には旧石器時代から近現代に至るまで、通時的に人々の生活が営まれ、数多くの遺跡が残されている。

旧石器時代、縄文時代については、遺構・遺物の検出が少ないが、旧石器時代の剥片尖頭器、三稜尖頭器や、縄文時代早・中・後期の土器が出土した下郷遺跡がある。下北方台地上において当該時期に位置づけられる遺跡はこれら以外には確認されておらず、その様相については明らかでない部分が多い。しかしながら、上記のようにわずかながら遺物が確認されていること、下北方台地北方にある垂水台地には、垂水第１遺跡、垂水第２遺跡、金剛寺原第１遺跡、金剛寺原第２遺跡など旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が存在しており、下北方台地にも人々の営みがあったことは間違いないだろう。

弥生時代になると、下郷遺跡において環濠集落が形成される。宮崎平野部では、下郷遺跡のほかに、国富町塚原遺跡などいくつかの環濠集落が営まれ、平野域での拠点的な集落として位置づけられるが、下郷遺跡もこれらの一つとしてあげることができる。その他に、台地東側低地部分の垣下遺跡からは、弥生時代前期末から中期初めの溝状遺構や旧河道が検出され、木製農具や筌が検出された。また、炭化米が付着した土器や、プラントオパールが検出され、当地での稲作の存在が明らかにされた。

古墳時代前期に位置づけられる遺跡は現在まで、下北方台地上では確認されていない。この時

期には、大淀川を挟んだ対岸にある生目古墳群において大型古墳が築造されている。中期中頃から後期になると下北方台地上で古墳の築造が開始され、下北方古墳群が形成される。現在、前方後円墳４基、円墳 12 基、地下式横穴墓 21 基が確認されている古墳群で、高塚墳についてはその実態がわからないものが多いが、地下式横穴墓では、金製垂飾付耳飾など多くの副葬品が出土した下北方地下式横穴５号をはじめ、21 基の調査がおこなわれており、宮崎平野部における地下式横穴墓のあり方を考える上で重要な情報を提供している。また、後期になると、台地北側の谷部に瓜生野村古墳など多くの横穴がつくられる。集落の様相は不明な点が多いが、下郷第４遺跡からは、古墳時代中期の住居跡が検出されている。

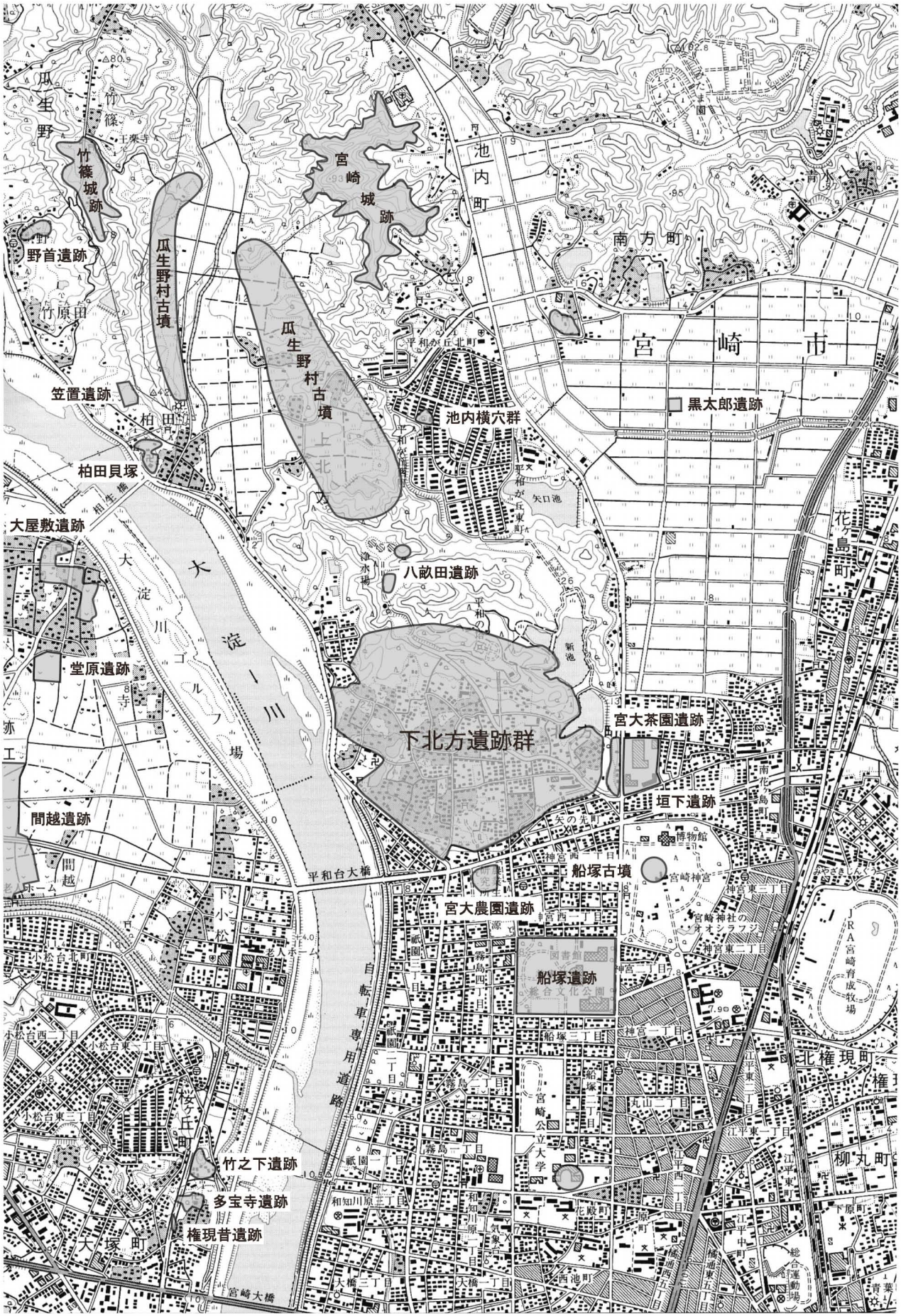
古代では、下郷第４遺跡において、住居跡、掘立柱建物、溝状遺構が、下北方塚原第１遺跡では、平行に掘られた２条の溝状遺構、土坑などとともに、古代瓦、鉄器製作関連遺物が検出され注目された。また、下北方台地のいくつかの地点では、凸面に格子目タタキが施された古代瓦が表面採集されている。今回調査地はその中でも、最も多くの瓦が採集されている地点で、古くから宮衙や寺院などの推定地として注目されてきた。今回調査は、これらを裏付けるような成果が得られており、このことは、古代の下北方、ならびに宮崎平野の様相を考える上で重要であった。

中世の下北方台地については、その様相が明らかでない部分が多い。ただし、台地北方の丘陵上には宮崎城が存在する。宮崎城は南北朝期の築城と伝えられる山城で、『日向記』、『土持文書』における建武３（1336）年の記事が、本城にかんする初出の記録であり、以後、長く伊東氏と島津氏の抗争の舞台となった。豊臣秀吉による国割の後には宮崎城を含む下北方周辺は延岡を支配した高橋氏領となり、元和元（1615）年の一国一城令によって廃城となる。この宮崎城で注目されるのは島津時代の城主であった上井覚兼による『上井覚兼日記』である。この詳細な内容は、残存状態の良好な遺構と相俟って、当時の城内の様子を知る上での貴重な史料となっている。

近世においても、下北方台地周辺は引き続き延岡藩の飛び地となっており、延岡藩代官所が置かれていた。代官所は、現在の大宮中学校が所在する場所にあったとされており、この時期においても、下北方台地が宮崎平野部の中で政治的な中心地の一つであったと言うことができる。

近現代になると、政治の中心地は、現在の中心市街地周辺に移っていく。それによって、下北方台地は、その重要性を失っていくかに見える。しかし、台地北側の越ヶ迫丘陵上には、昭和 15（1940）年に八紘一宇の塔（現在の平和の塔）が建造される。また、同年、神武天皇の寓居跡とされている皇宮神社には、皇軍発祥の地碑が建立された。これらは、皇紀 2600 年記念事業の中で建造・建立されたものであり、現在的な歴史的位置づけは別としても、近現代日本史を考える上では非常に重要な意味を持つものであると言えよう。

以上のような通時的な遺跡の分布状況や、その密度の濃密さから、下北方台地での重層的な歴史の積み重ねを知ることができる。加えて、弥生時代では下郷遺跡、古墳時代では下北方古墳群、古代では下北方塚原第２遺跡といった、各時代の宮崎平野を代表するような遺跡の存在からは、下北方台地周辺は旧石器時代から現代に至るまでのきわめて膨大な時間の流れの中で、常に宮崎平野の中心的な役割を担う人々が生きてきた地域の一つであると言うことができる。すなわち、下北方台地周辺は、宮崎平野の歴史を紐解く上で欠かすことのできない極めて重要な地域であることがわかる。


宮崎城跡
竹篠城跡
瓜生野村古墳
瓜生野村古墳
野首遺跡
笠置遺跡
柏田貝塚
大屋敷遺跡
堂原遺跡
間越遺跡
池内横穴群
黒太郎遺跡
八畝田遺跡
下北方遺跡群
宮大茶園遺跡
垣下遺跡
船塚古墳
宮大農園遺跡
船塚遺跡
竹之下遺跡
多宝寺遺跡
権現昔遺跡
大淀川
宮崎市
池内町
南方町
平和台大橋
宮崎大橋
自転車専用道路
JRA宮崎育成牧場
総合文化公園
宮崎公立大学
宮崎神宮
博物館

第１図　周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	主な時代	番号	遺跡名	所在地	主な時代
1	**下北方塚原第２遺跡**	**宮崎市下北方町塚原**	**古墳・古代**	16	下北方３号墳	宮崎市下北方町塚原	古墳
2	花切第１遺跡	宮崎市下北方町花切	古墳・古代	17	下北方４号墳	宮崎市下北方町塚原	古墳
3	花切第２遺跡	宮崎市下北方町花切	古墳・古代	18	下北方５号墳	宮崎市下北方町塚原	古墳
4	下北方塚原第１遺跡	宮崎市下北方町塚原	古墳・古代	19	下北方６号墳	宮崎市下北方町塚原	古墳
5	下郷第２遺跡	宮崎市下北方町下郷	古代・近世	20	下北方７号墳	宮崎市下北方町塚原	古墳
6	平和台下遺跡	宮崎市下北方町下郷	不明	21	下北方８号墳	宮崎市下北方町塚原	古墳
7	下郷遺跡	宮崎市下北方町下郷	弥生	22	下北方９号墳	宮崎市下北方町塚原	古墳
8	下郷第３遺跡	宮崎市下北方町下郷	古墳・古代	23	下北方１０号墳	宮崎市下北方町塚原	古墳
9	下郷第４遺跡	宮崎市下北方町下郷	古墳・古代	24	下北方１１号墳	宮崎市下北方町塚原	古墳
10	下北方５号墳周辺遺跡	宮崎市下北方町塚原	古墳・古代	25	下北方１２号墳	宮崎市下北方町塚原	古墳
11	下北方１号墳周辺遺跡	宮崎市下北方町塚原	古墳・古代	26	下北方１３号墳	宮崎市下北方町越ヶ迫	古墳
12	横小路遺跡	宮崎市下北方町横小路	古墳・古代	27	下北方１４号墳	宮崎市下北方町越ヶ迫	古墳
13	大宮中学校校庭遺跡	宮崎市下北方町横小路	弥生	28	下北方１５号墳	宮崎市下北方町花切	古墳
14	下北方１号墳	宮崎市下北方町塚原	古墳	29	下北方１６号墳	宮崎市下北方町高下	古墳
15	下北方２号墳	宮崎市下北方町塚原	古墳	※図中、点線が下北方遺跡群の範囲を示す。			

第２図　調査地位置図（S=1/10000）

第３節　宮崎市域の主要古代遺跡（第３図）

宮崎市域において、古代に位置づけられる遺跡は、数こそ決して多くはない。しかし、近年、市内各地において、いくつかの遺跡の調査がおこなわれ、次第に古代における宮崎市の様相を考える上での素地が整いつつある。ここでは、これらのうちいくつかの主要な遺跡についてここで取り上げ、その概要を示すことにする。

【下村窯跡群】宮崎市佐土原町東上那珂：第３図 - ２

佐土原町内の一ツ瀬川右岸に広がる佐土原丘陵上に位置する。遺跡の所在地は、一ツ瀬川流域から宮崎平野部へと抜ける丘陵間の縊路を見下ろす位置にあたる。この隘路は古代官道と推定される道であり、概ね現在の国道 219 号線と重複している。

本窯跡は ８ 世紀中葉から９世紀後半までの窯跡で、10 基の窯跡が調査された。本窯跡は瓦陶兼窯であり、主要器種は、埦・坏・長胴壷・甕などである。また、瓦は縄目タタキを持つもので、西都市にある国分寺、日向国衙へ供給されていたことで知られる。

【北ヶ迫遺跡】宮崎市大字島之内字北ヶ迫：第３図 - ３

宮崎市街地北側の丘陵上に位置する。当地は、下村窯跡を経て日向国衙へと抜ける推定古代官道と宮崎市街地から海沿いを新富町方面へ抜ける現国道 10 号線の分岐する地点にあたり、古代においても交通の要衝であったと推定できる。

本遺跡では、古代に位置づけられる竪穴住居跡が検出されている。また、近世の道路状遺構からの出土ではあるが円面硯が検出されたことに注目できる。

【桜町遺跡】宮崎市花ヶ島町：第３図 - ４

宮崎市街地北東部、第１砂丘と内陸部丘陵の中間部にある低地に位置する。遺跡はその中の標高約８ｍほどの微高地上に立地する。弥生時代を中心とする遺跡であるが、古代に位置づけられる土坑３基、竪穴住居跡１軒、掘立柱建物９棟、溝状遺構６条が検出されている。

これら遺構から、輸入陶磁である長沙窯瓷や畿内産緑釉陶器が検出された。また、推定古代官道に近接していること、炭化米が検出されたことなどから、本遺跡が宮崎郡衙別院あるいは正倉別院であるという可能性が指摘されている。

【下北方下郷第４遺跡】宮崎市下北方町下郷：第３図 - ５

下北方塚原第２遺跡の東側に近接した遺跡である。古代の竪穴住居跡 11 軒、溝状遺構１条、掘立柱建物２棟が検出されている。

11 軒の竪穴住居跡のうち、SA10 と呼ばれる住居跡からは、須恵器のコップ形土器が出土した。この土器は、官衙関連遺跡周辺で出土することが言われており、当遺跡周辺の性格を考える上で重要な遺物であると言えよう。また、掘立柱建物とされる遺構のうち SB１は建物の一部が調査区外に出ている可能性があり全体形が不明瞭であるものの、柱穴径が約 70ｃｍ、桁行の柱間間隔が約３ｍという大型のものであり注目できる。

【猿野遺跡】宮崎市阿波岐原町猿野：第３図 - ６

海岸部近くの第２砂丘上に位置する。当遺跡は主に古墳時代の集落遺跡であるが、構築時期の判然としない溝状遺構から、古墳時代の土師器、古代の高台付坏などとともに、縄目タタキが施された平瓦が出土した。当遺跡北方約 2.5ｋｍの位置には式内社である江田神社が存在すること

などと合わせて、周辺における官衙関連遺跡の存在が想定されている。

【余り田遺跡Ⅱ区】宮崎市大字浮田字余り田：第３図 - 7

大淀川右岸､標高約８ｍの低湿地に位置する。流路状遺構から､きわめて多量の遺物が出土した。遺物には、土師器、須恵器、鉄製品、緑釉陶器、木製品、獣骨などがある。中でも注目されるのが、土師器を中心とする墨書土器で、その数 160 点にも上る。これら遺物は、出土状況から廃棄にともなうものと位置づけられているが、報告者は、墨書土器を使用した祭祀をおこなう集団が周辺に存在したことを重要視している。

市内には他に、下北方塚原第１遺跡、陣ノ内遺跡、前原南遺跡、塚田遺跡、中別府遺跡などにおいて墨書土器が検出されている。

【京園遺跡】宮崎市大塚町京園：第３図 - 8

大淀川右岸の低丘陵裾部に位置する。竪穴住居跡３軒、土坑墓１基、竪穴状遺構１基、溝状遺構９条が検出された。竪穴住居跡にはいずれもカマドが作り付けられていたが、そのうち３号住居跡のカマドは、直角に曲がる煙道が取り付けられていた。また、１号、３号住居跡からは、両端穿孔土錘が出土している。

【蕨野遺跡】宮崎市高岡町大字花見字蕨野：第３図 - 9

大淀川河口より約 17ｋｍ内陸の左岸、標高約 60mの丘陵上に位置する。９世紀後半に位置づけられる土坑９基、土師器焼成土坑６基以上が検出された。土師器焼成土坑は、そのほとんどが削平を受けているが、比較的遺存状態の良い 6 号窯は、長軸２ｍ、短軸 1.5mの隅丸方形であることが知れる。当該時期における土師器焼成遺構は県内でも珍しく、当時の土師器生産を知る上で重要なものである。

【八児遺跡】宮崎市高岡町大字下倉永：第３図 - 10

大淀川に注ぐ江川と瓜田川の間にある標高約 12mの丘陵上に位置する。11 世紀後半から 12 世紀前半に位置づけられる土坑墓から、湖州鏡、鉄鈴、銅鈴、石鍋など豊富な副葬品が検出された。中でも湖州鏡は県内でも類例が少なく、本土坑墓被葬者の性格を考える上で重要である。調査面積が狭小で遺跡全体の様子は不明ではあるが、このほかに掘立柱建物、竪穴住居跡などが検出された。

【的野遺跡】宮崎市高岡町大字上倉永：第３図 - 11

大淀川右岸の標高約 26mの独立丘陵上に位置する。本遺跡では、土坑２基とピット群が検出されている。遺構からの出土ではないが、土師器、須恵器、焼塩土器などのほかに、緑釉陶器、灰釉陶器、越州窯系陶磁器などが検出された。

【白ヶ野第３遺跡】宮崎市清武町大字船引字白ヶ野：第３図 - 12

大淀川右岸､標高約100mの台地上平坦面に位置する。カマド付の竪穴式住居跡が３軒検出され、土師器、須恵器や、焼塩土器などが検出された。また、遺構外から底部外面に「金丸」かと思しき墨書がなされた土師器坏が出土している。

【松ヶ迫窯跡】宮崎市郡司分：第３図 - 13

大淀川右岸河口近くに位置する。宅地開発の結果、現在では詳細な位置を知ることができない状況である。8 世紀前半に位置づけられる須恵器窯跡３基が確認され、うち２基について調査が

おこなわれている。本報告がないために詳細不明であるが、窯の構造は半地下式のものであったと考えられている。遺物は、１号窯跡から坏蓋、高台付椀、甕などが、２号窯跡からは坏蓋、甕などが出土している。

【下田畑遺跡】宮崎市清武町大字木原字下田畑：第３図 - 14

宮崎平野南部を流れる加江田川下流域の丘陵上に位置する。この丘陵およびその周辺にある遺跡は、宮崎学園都市遺跡群と総称されており、各時代の遺跡が数多くみられる地点で、古代に位置づけられる遺跡もかなり集中して分布している。本遺跡では、古代のカマド付竪穴住居跡２軒、掘立柱建物７棟、溝状遺構１条、土坑１基が検出された。竪穴住居跡はいずれもカマドが複数構築されており、ＳＡ１では北・東・西壁に各１基、ＳＡ２は北・東壁に各１基のカマドがあった。ＳＡ２では北カマドの廃棄後に東カマドが構築されていた。また、ＳＡ１からは「宅」字が墨書された土師器坏が検出されており、注目できる。

【小山尻東遺跡】宮崎市清武町大字木原字小山尻東：第３図 - 15

宮崎学園都市遺跡群中の遺跡である。竪穴状遺構が検出された。遺構は、長さ約 6.6m、幅約 4.3mと大型のもので、この中から越州窯系青磁椀、緑釉皿、篠窯産鉢、須恵器、土師器、内黒土器などが出土した。これらの土器のあり方から、当地域における 10 世紀前半の土器様相を知ることができる。

【前原南遺跡】宮崎市大字熊野字前原：第３図 - 16

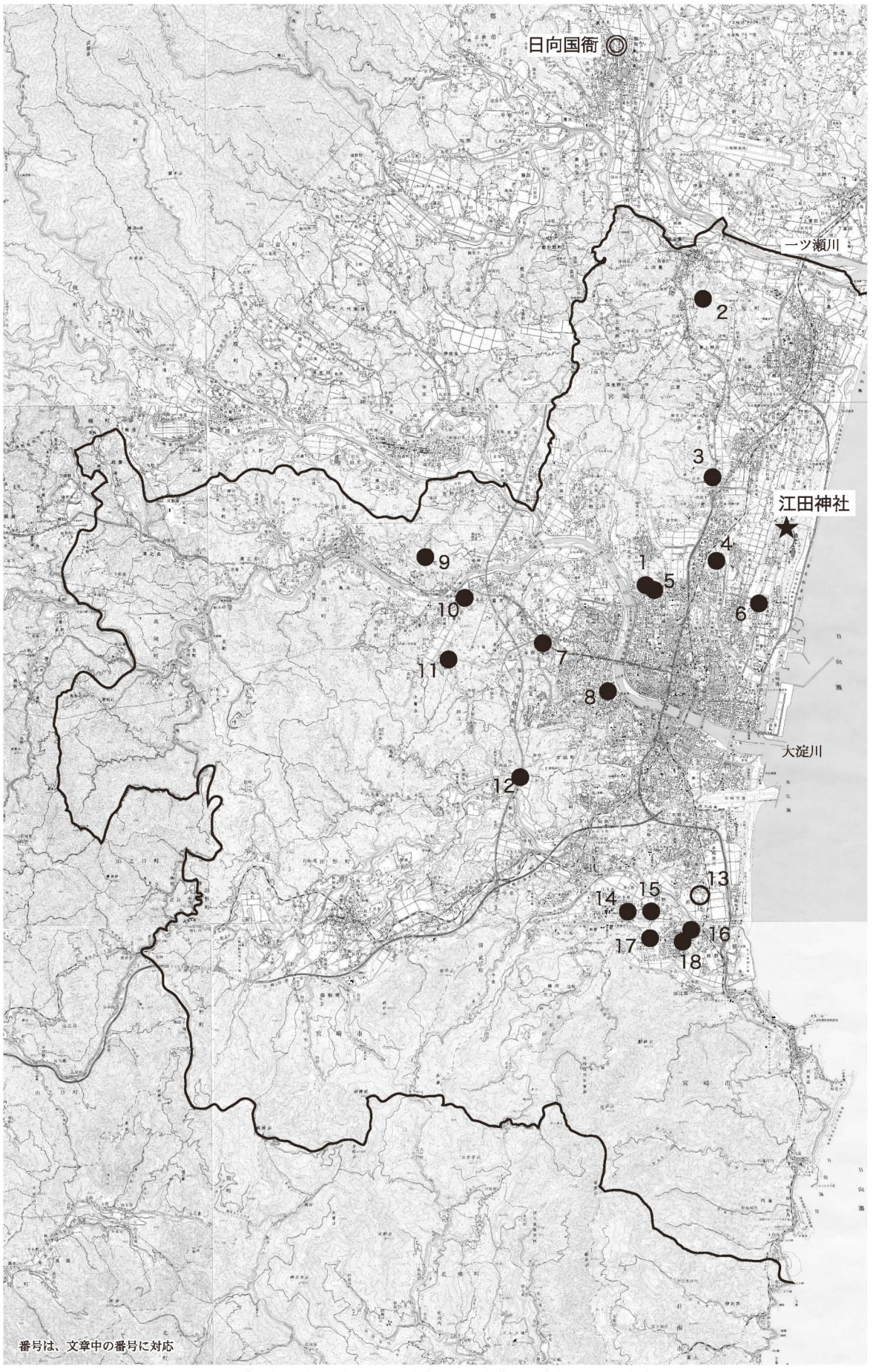
宮崎学園遺跡群中の遺跡で、丘陵東端部付近に位置する。10 世紀前半に位置づけられる竪穴住居跡、掘立柱建物 17 棟が検出された。竪穴住居にはカマドが構築されているが、いずれも煙道を屋外に伸ばすタイプのもので、ＳＡ１には２基のカマドが構築されていた。掘立柱建物はほとんどが２間 ×２間あるいは２間 ×３間のもので、その中に、東西庇をもつものや総柱建物になるものが存在する。また、内黒土器椀、手捏土器、紡錘車が出土して、祭祀的性格が想定される土坑も検出された。

【平畑遺跡】宮崎市大字熊野字平畑：第３図 - 17

上述の下田畑遺跡が所在する丘陵の西端付近に位置する。古代の遺構としては、竪穴住居跡２軒と掘立柱建物 14 棟が検出された。これらは分布から、庇付掘立柱建物、掘立柱建物２棟がコの字形に配置された単位で構成されるＡａ群、庇付掘立柱建物、掘立柱建物２棟、カマド付竪穴住居跡１軒からなるＡｂ群、掘立柱建物８棟とそれを囲む溝で構成されるＢ群、カマド付竪穴住居跡とピット群で構成されるＣ群に分けられる。Ａｂ群からＡａ群への集落の変遷が考えられていること、特定の遺物の出土傾向に偏りがあることなど、当地域の集落構成の在り方を考える上で重要な遺跡である。

【陣ノ内遺跡】宮崎市大字熊野字陣ノ内：第３図 - 18

宮崎学園都市遺跡群中の遺跡である。カマド付の竪穴住居跡９軒と掘立柱建物 13 棟が検出された。竪穴住居のカマドは、煙道の付き方から３つに分類されている。掘立柱建物は 11 棟が２間 ×２間あるいは２間 ×３間であり、１棟が２間 ×４間と大型で東西庇を持っている。掘立柱建物のありかたから、３時期に分けられるが、概ね 10 世紀前半を中心とした時期に位置づけられる集落遺跡である。



第３図　宮崎市主要古代遺跡分布図（S=1/200000）

第Ⅱ章　調査に至る経緯と調査の経過

第１節　調査に至る経緯

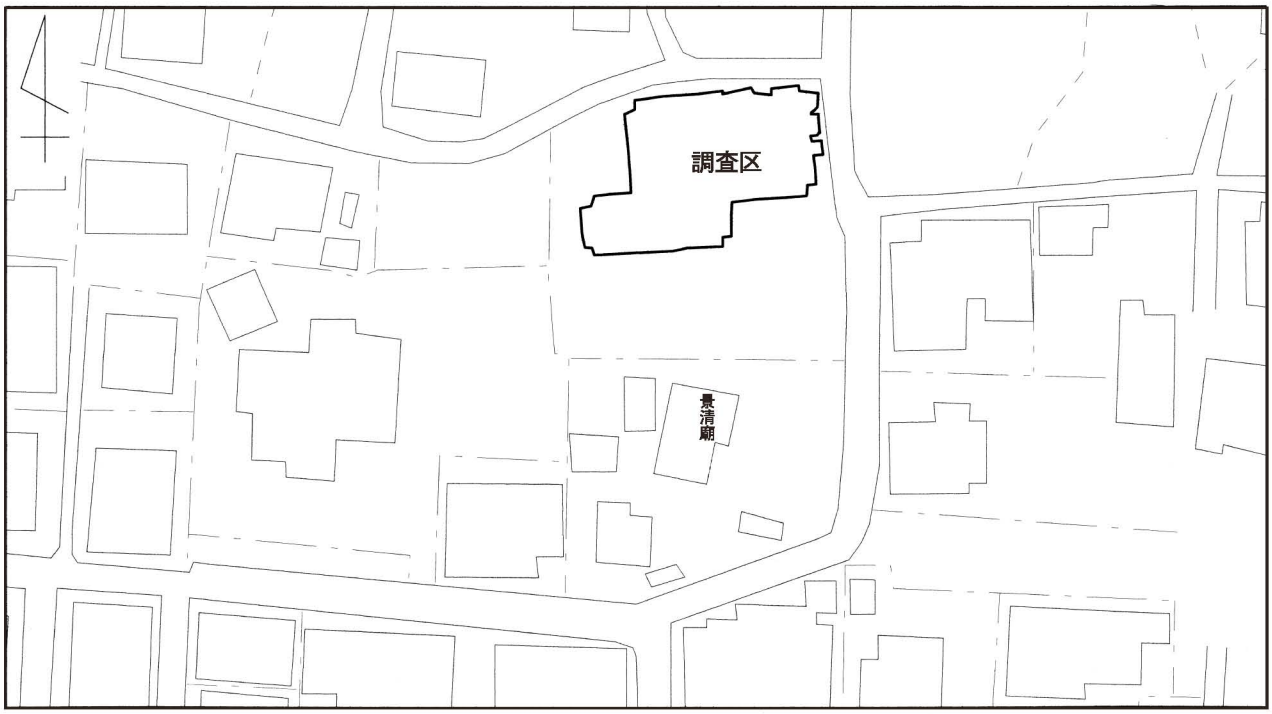
平成 21 年２月 19 日、下北方地区自治公民館建設に伴い、宮崎市下北方町塚原 5836 番地における埋蔵文化財所在の有無について照会がなされた。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「下北方遺跡群」の域内にあたるため、平成 21 年３月３日に、埋蔵文化財の有無を確認するための確認調査をおこなった。その結果、調査地内においてピット、竪穴住居もしくは溝と思われる遺構の存在と、それらにともなう古代瓦、土師器などの遺物が確認された。

そのため、事業者と埋蔵文化財の取り扱いにかんする協議を重ねたが、工法等との兼ね合いから、遺構の破壊は残念ながら避けることができなかった。したがって、建物建築に伴い遺構面まで掘削の及ぶ範囲である約 504 ㎡を対象として本発掘調査を実施することとなった。現地での発掘調査は平成 21 年５月 14 日から平成 21 年７月 25 日までの期間実施した。現地調査終了後の整理作業については平成 22 年１月 12 日から平成 22 年３月 29 日および、平成 22 年５月 17 日から平成 22 年９月８日までの期間実施した。

第２節　調査の経過

調査前において、調査地には公民館が建っていた。公民館の建て替え工事に伴って、この既存建物の撤去がおこなわれたが、その際の基礎撤去作業で遺構に影響が及ぶ危険性もあったために工事立会をおこなった。その後、建物建築に伴って遺構まで影響の及ぶ範囲である部分に調査区を設定し、合計 453 ㎡を調査した（第４図）。

調査はまず、トータルステーションを用いて、調査地近隣の座標既知点より、調査地内に任意で設定した杭へと座標を移動することからおこなった。



第４図　調査区配置図（S=1/1000）

その後、重機による表土除去作業をおこなった。調査地周辺では、アカホヤ火山灰層より上層には縄文時代から中世の遺物包含層である黒色土が堆積し、その上層に表土が堆積するのが通有である。しかし、調査区内の大部分において、表土直下でアカホヤ火山灰層が検出された。このことは、当地が大きく改変を受けていることを示しているが、それがいつの時代におこなわれたのかについては判断することができなかった。

表土除去の後は、発掘作業員による調査区内の精査作業をおこなった。調査区内には、多くの撹乱坑が認められ、古代から近現代の遺物が混在して検出された。調査地は現在までに公民館、保育園、宅地などに利用されてきた経緯があり、撹乱坑はこれらの建築や、不要物の廃棄などにともなって形成されたものであると考えられる。

上記の撹乱土の除去と並行して、発掘作業員による遺構検出作業をおこなった。遺構は調査区全体に分布しており、堀立柱建物、竪穴住居跡、溝状遺構、土坑、ピットなどの遺構の存在が確認できた。遺構検出の後には、遺構の掘削作業に着手した。

掘削の進んだ遺構から、順次記録作業をおこなった。記録作業は、調査員の手測りによる実測作業、トータルステーションを用いた遺構実測作業、35 ㎜フィルムカメラ、中版フィルムカメラ、デジタルカメラを用いた写真撮影作業によった。また、調査区周辺の状況、調査地全体の様子を記録するために空中写真撮影もおこなった。

調査終盤には、一般の市民に向けての発掘調査現地説明会を実施した。猛暑の中にもかかわらず、約 100 名に上る参加者があった。このことは、地域の埋蔵文化財について広く周知するために非常に有意義なものであったと言えよう。

これら作業の終了後には、重機によって調査区の埋め戻し作業をおこない、調査地を調査着手前の状態に復旧し、現地における調査を終了した。

現地説明会の様子

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　調査成果の概要

調査は、調査地内のうち建物建築により遺構に影響が及ぼされる部分に調査区を設定しおこなった。既存建物が存在していたこと、以前からさまざまに利用されてきた土地であることなどから、調査区内においても大きく撹乱を受けている部分がかなり存在していたが、これらによる遺構の削平を免れた部分には多くの遺構、遺物が確認された（第５図）。

検出された遺構・遺物には、弥生時代・古墳時代・古代・中世に位置づけられるものと時期が明らかでないものがある。これらの遺構・遺物の中で中心的なものは古代に位置づけられるものであり、これに比べてその他の時期の遺構・遺物は少なかった。弥生時代に位置づけられるものは土坑があり、弥生土器小片が検出された。古墳時代の遺構には竪穴住居跡があり、それにともなって土器片や石器が検出された。古代の遺構には、掘立柱建物、溝状遺構、土坑、ピット、柱列と思しき遺構などがある。その各遺構から非常に多くの遺物が検出されたが、中でも、宮崎市域において初の出土となる軒丸瓦をはじめとした多量の瓦片が検出されたことには注目できる。中世の遺構は少なく、溝状遺構が１条確認されたにすぎない。

第２節　古代以前の遺構と遺物

竪穴住居跡

竪穴住居跡１（第６～８図）

遺構　調査区北東端で検出された。長方形プランの竪穴住居跡であり、規模は東西 3.5m、南北 3.9mである。住居東壁中央付近にはカマドが作り付けられていた。柱穴は住居内に２本確認された。また、住居床面から掘り込まれた土坑が認められる。

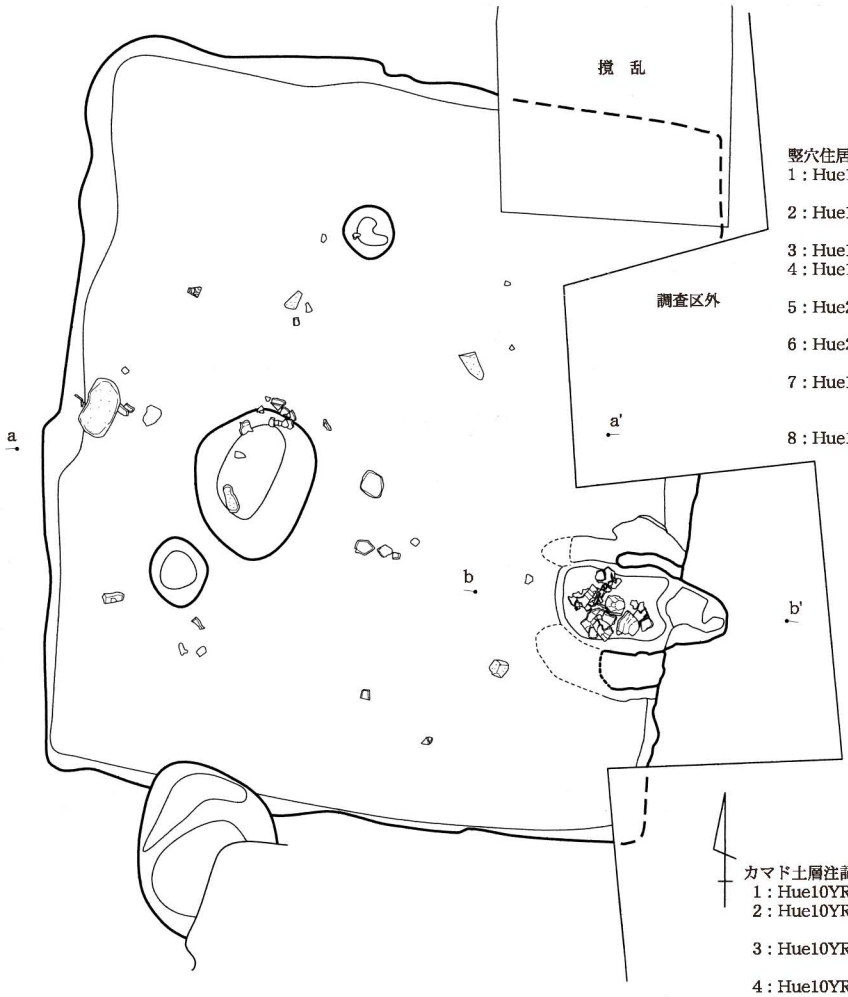
検出面から掘り方までの深さは 32ｃｍであり、そこに厚さ ８ｃｍの貼床がなされていた。貼り床はアカホヤ火山灰・牛の脛ロームが混じる黒褐色土で、住居を掘削する際に出た排土を利用したものと思われる。貼り床は全体的にやや締まっていたが、明確な硬化面は確認できなかった。

カマドは作り付けのもので、壁体は崩落していた。住居中央付近にまで、わずかながらカマド粘土・焼土が見られたこと、崩落したカマド粘土上に土師器埦が供献されたような状態で出土したことなどから廃棄にあたってカマドを破壊するなど、何らかの祭祀的行為がおこなわれたものと考えられる。カマドは､火床面が住居壁より内側にあり､住居外側に短い煙道がつくものである。また、火床面部分に軽石製の支脚が置かれたままの状態であった。崩落土、火床面直上より、土師器が検出された。

遺物　遺物は住居内覆土、およびカマド内に散在する状況で検出された。１・２は、土師器の埦で、カマド崩落土状から出土した。１は手捏ねによる成形でナデによって整形されている。２も手捏ねによる成形で、その後に外面下部には手持ヘラケズリ、外面上部には不定方向のナデが施される。外面からの穿孔が一か所に認められる。３は高坏である。口縁部のみの破片であり、受部との接合部分で剥離していて受部以下は残存していない。口縁部はやや外反しながら立ち上がっており、端部は丸くおさめられている。４は中型の長胴甕である。胴部は球形に近く、口縁部はわ

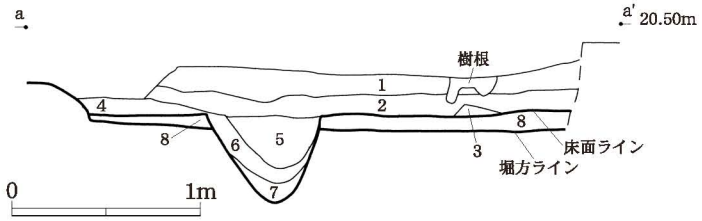
掘立柱建物１
柱列１
住居跡１
土坑８
土坑９
土坑４
土坑６
土坑３
土坑２
掘立柱建物２北側溝
土坑５
土坑７
住居跡２
柱列２
土坑１
溝状遺構１
掘立柱建物２
溝状遺構２
0
10m
掘立柱建物２西側溝

第５図　遺構配置図



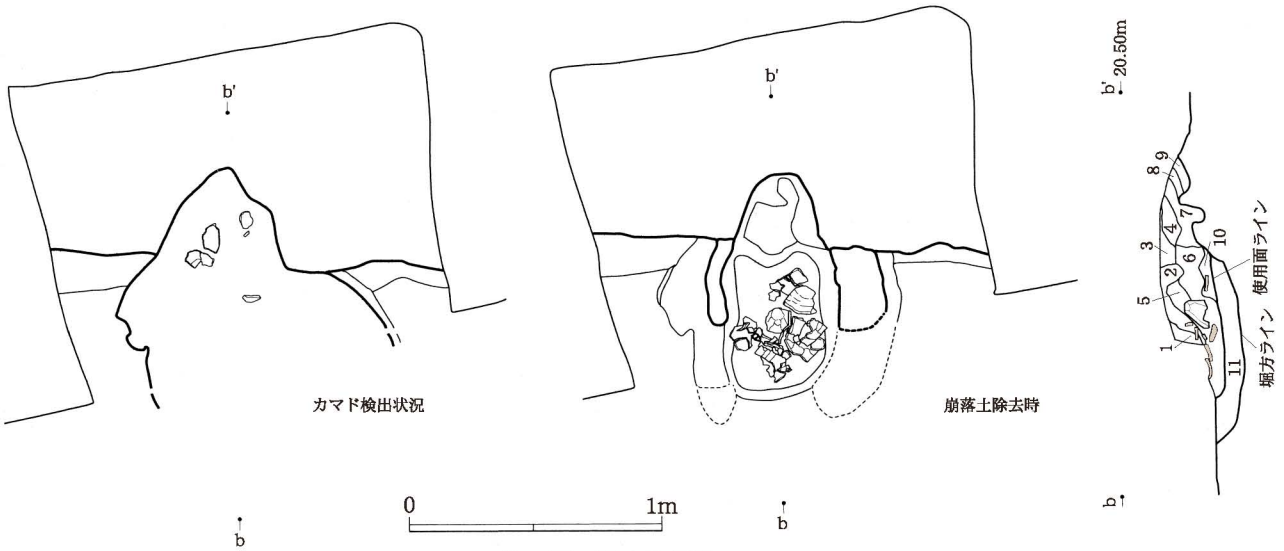
竪穴住居跡1

1：Hue10YR2/3　黒褐色土。締まり弱い、粘性有。アカホヤ粒をわずかに含む。
2：Hue10YR2/2　黒褐色土。上層より締まっている、粘性有。アカホヤ粒をわずかに含む。
3：Hue10YR2/3　黒褐色土。やや締まり有、粘性有。
4：Hue10YR2/3　黒褐色土。やや締まり有、粘性有。アカホヤ粒をわずかに含む。
5：Hue2.5Y3/1　黒褐色土。締まり無、粘性有。含有物無。
6：Hue2.5Y3/1　黒褐色土。上層と同質土だが、ローム粒を多量に含む。
7：Hue10YR3/3　暗褐色土。締まり無、粘性有。ロームに似るが非常に軟らかい。地山の崩落堆積か。
8：Hue10YR2/2　黒褐色土。やや締まり有、粘性有。アカホヤブロック、牛の脛ロームブロックを多く含む。

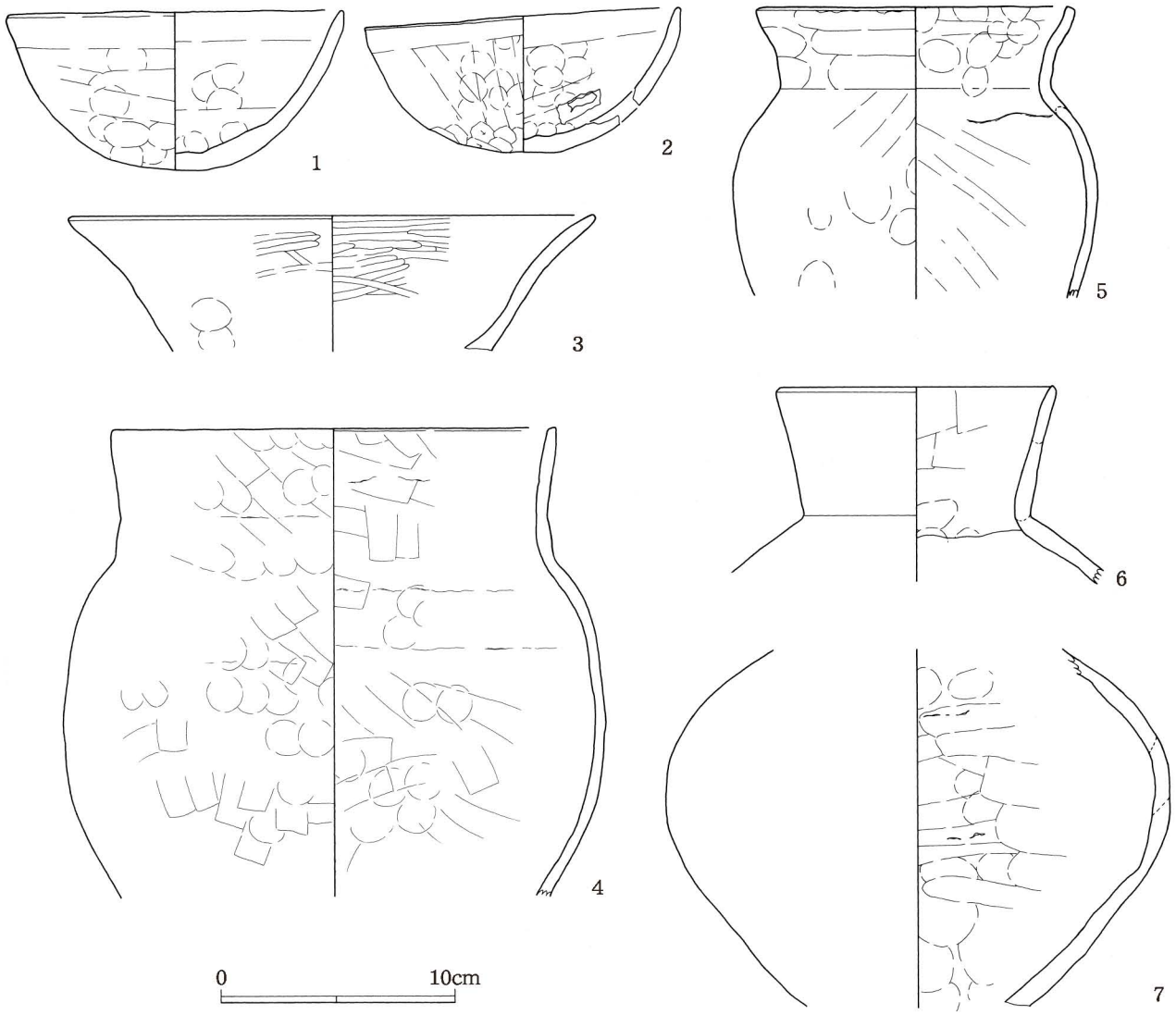


カマド土層注記

1：Hue10YR2/3　黒褐色土。締まり弱い、粘性有。焼土を少量含む。
2：Hue10YR2/3　黒褐色土。締まり有、粘性有。黄白色粘土と黒色土の混土層。焼土粒を少量含む。
3：Hue10YR2/3　黒褐色土。締まり有、粘性有。２と同質土だが、焼土を含む割合多い。
4：Hue10YR3/4　暗褐色土。やや締まり有、粘性有。黄白色粘土に黒色土が混じる。焼土を多く含む。
5：Hue10YR2/3　黒褐色土。締まり有、粘性有。黄白色粘土に黒色土が混じる。焼土を多く含む。
6：Hue7.5YR3/4　暗褐色土。締まり有、粘性有。2・5が被熱で焼土化したような土。
7：Hue10YR3/3　暗褐色土。締まり有、粘性有。黒色土、黄白色粘土が半々に混じった土。焼土粒を含む。
8：Hue10YR2/3　黒褐色土。締まり無、粘性有。アカホヤブロックを含む。
9：Hue10YR2/3　黒褐色土。締まり無、粘性有。８と同質土だが、アカホヤを含まない。
10：Hue10YR2/3　黒褐色土。やや締まり有。
1～3　天井崩落土
4～7、10　カマド破壊時の堆積土
8、9　煙道からの流入土



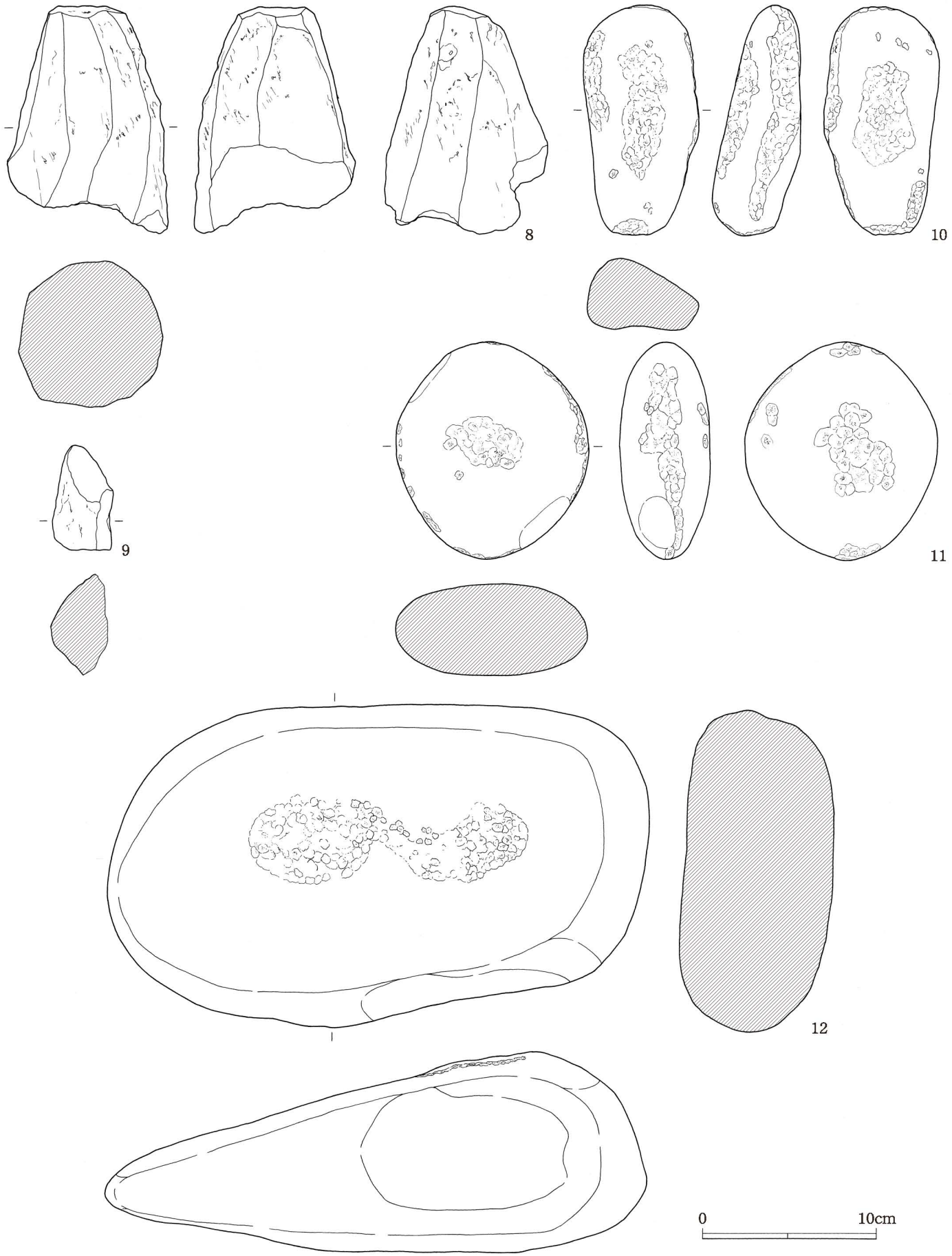
第６図　竪穴住居跡１



第７図　竪穴住居跡１出土遺物（１）

ずかに外方に向かって直線的に立ち上がっている。内外面とも指オサエ、ナデで調整がなされており、粘土紐の接合痕跡が観察できる。５は小型の壺である。球形に近い胴部で、肩部と口縁部の境は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外方に向かって立ち上がり、口縁端部はわずかに内湾する。調整は指オサエやナデなど、やや粗雑な作りであり、頸部内面には粘土紐の接合痕跡が観察できる。６・７は壺である。２点は同一個体と判断できる。胴部中央が膨らみ、底部に向かって急にすぼんでいて、算盤玉のような形態である。口縁部は外方に向かって直線的に立ち上がっている。内面は指オサエ、ナデで調整されている。外面は風化のため調整が判然としない。

８・９は軽石製のカマド支脚である。八ないし九角錐状であるが、上面、底面ともほぼ平坦に仕上げられている。被熱により、赤化している。10・11 は敲石である。10 は全体的に敲打痕跡が認められる。また、一部が赤化しており、熱を受けうけているものと考えられる。11 は扁平な円形である。表裏面、側面に敲打痕跡が認められる。また、一部に磨面が認められる。12 は金床石か。図上、左側が薄くなっており、側面観は楔形である。表裏面に敲打痕が認められる。また、



第８図　竪穴住居跡１出土遺物（２）

高温での作業によるものと考えられる表面の赤化・黒化や銹のようなものが石材端部付近に認められる。本遺構から出土した遺物は、概ね５世紀後半から６世紀はじめに位置づけられる。

竪穴住居跡２（第９，10 図）

遺構　調査区中央付近で検出された。古代や近現代の削平の影響で遺構の大部分は残存しておらず､わずかに遺構床面とコーナー部の一部分のみが確認された。床面が平坦であることやコーナー部の形状から方形ないし長方形のプランと推測できることから、竪穴住居跡であろうと判断した。

規模は、東西 2.9mということのみが残存部分から判断できるが、他は不明である。また、竪穴住居跡１で見られた貼床は存在せず、明らかに柱穴と判断できるピットも検出できなかった。また、住居東壁南側に床面が焼けている部分が存在する。この部分は竪穴住居跡１においてカマドが作り付けられていた部分とほぼ同じ位置であることからカマドかとも考えられるが、削平の影響などで判然としない。

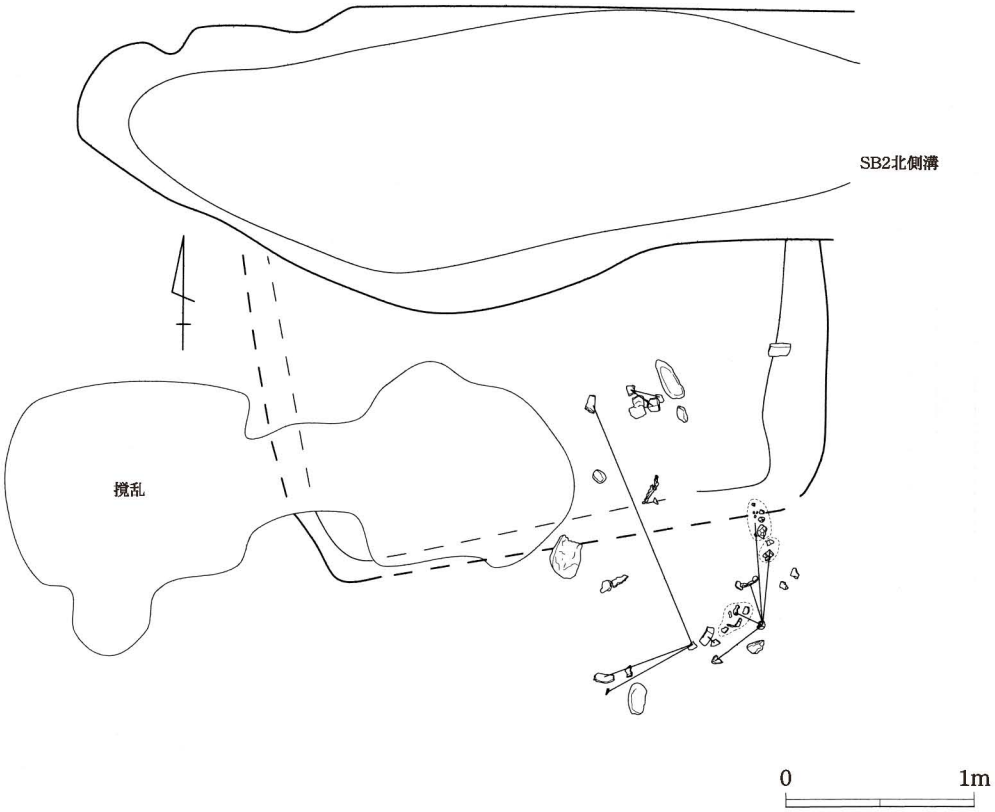
遺物　遺物は、土師器、石器などが出土した。撹乱などの影響で一部住居外から出土したものも含まれるが、住居内出土遺物との接合関係などから、本遺構に伴う遺物と判断して報告する。13～16 は高坏である。13 は坏部から脚部の破片である。坏部形状は椀形で、口縁部はわずかに外反し端部は丸くおさめられている。脚部は中空で、直線的に外方へ開いている。坏部と脚部の接合部は坏底部に作り出された突起を脚へ差し込んでなされている。調整は坏部には内外面とも指オサエ、ナデが、脚部外面は縦方向のナデ、内面は横方向へ向かって工具によるケズリが施されている。14 は口縁部付近、脚部付近の破片で、胎土の状況などから同一個体と判別できる。坏部形状は椀形で口縁端部はごくわずかに外反している。脚部は直線的に下方へ向かった後、裾部がラッパ状に開く形態である。調整は全体的に指オサエ、ナデ調整が施されており、裾部は、横方向へのナデで仕上げられている。15 はやや大型の高坏で、口径は推定で 27.9ｃｍである。受部と口縁部の境界は不明瞭で、坏部が浅く、口縁部は外方に向かって直線的に立ち上がっている。調整は内外面ともに指オサエ、ナデによる。16 は高坏脚部片である。底部の直径は推定で 16.2ｃｍである。ラッパ状に開く形状で、内外面ともに指オサエ、ナデによる調整が施されている。15 と同一個体であろうかと思われる。17 は砥石である。砂岩製で、各面は平坦になっている。18 は尾鈴山酸性岩製の金床石片である。全体的に被熱しており、石材の端部付近は特に強く熱を受けて、赤化している箇所が認められる。使用中に破損したために廃棄されたものであろうか。本遺構から出土した土器は、概ね５世紀後半から６世紀はじめに位置づけられる。

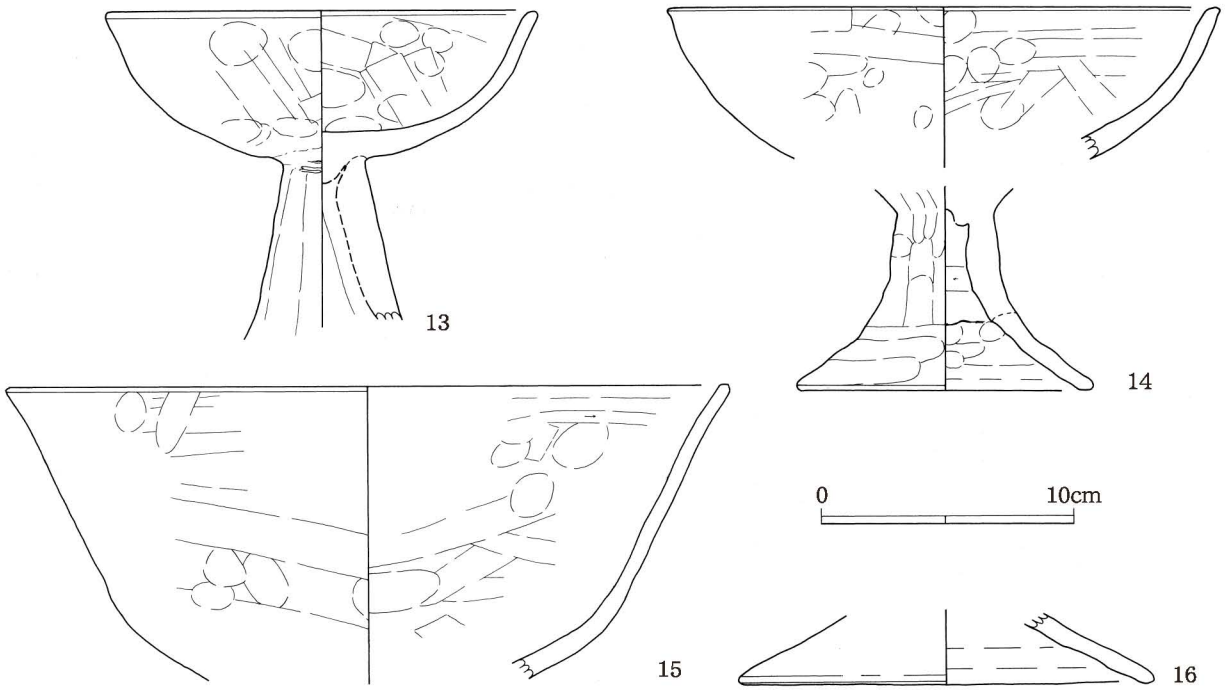
土坑

土坑１（第 11 図）

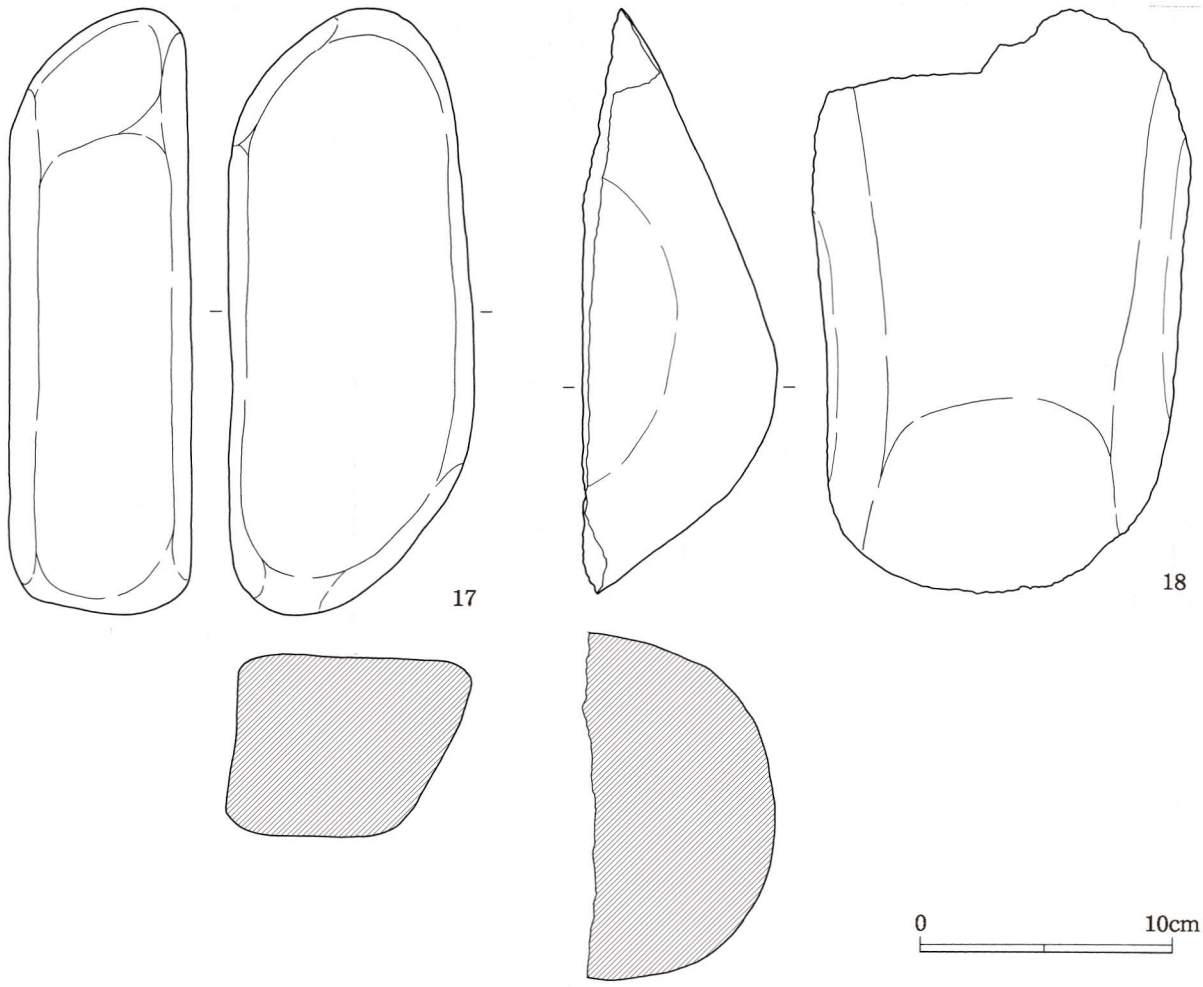
遺構　規模が東西 2.7m、南北 1.9mで長方形の土坑である。検出面から褐色ロームまで掘り込まれた土坑で、断面形は逆台形状である。底面までの深さは 87ｃｍである。土層の堆積状況からは掘削後すぐに埋め戻されているようにも見える。土坑の性格は判然としない。

遺物　ごく少量の弥生土器片が出土したにすぎないが、他の時期の遺物は見られないことから、本遺構は弥生時代に位置づけられよう。詳細な時期については小片のため明確にできない。

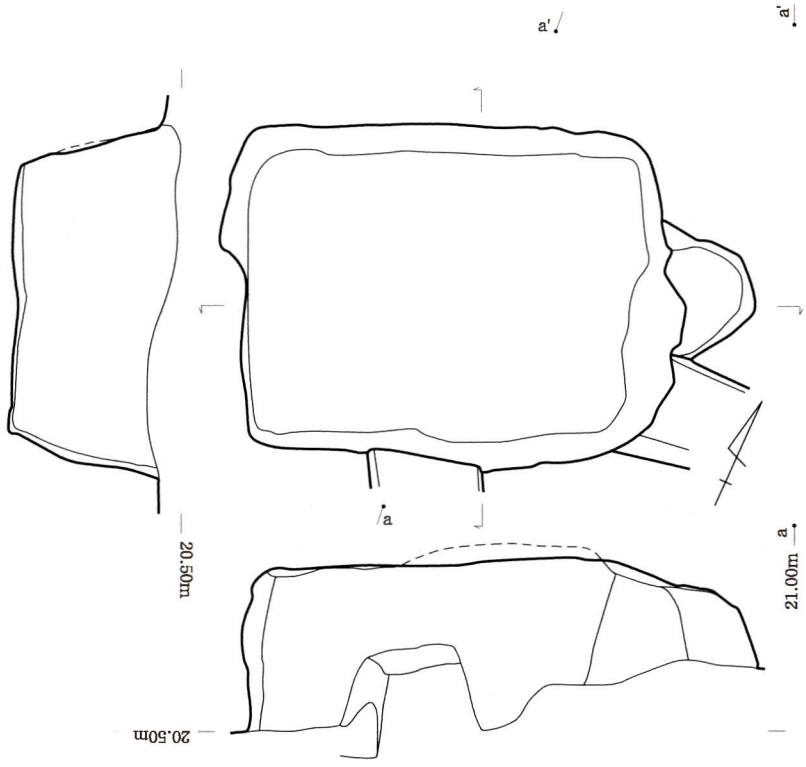




第９図　竪穴住居跡２、同出土遺物



第10図　竪穴住居跡２出土遺物



土層注記
1：Hue10YR2/2　黒褐色土。締まり弱い、粘性有。ごくわずかに焼土粒が混じる。
2：Hue10YR2/2　黒褐色土。締まり弱い、粘性有。暗褐色ロームブロックを含む。
3：Hue10YR3/3　暗褐色土。締まり弱い、粘性有。暗褐色ロームブロックを多く含む。
4：Hue10YR3/4　暗褐色土。締まり弱い、粘性有。暗褐色ロームブロックを多く含む。
※1：溝状遺構1覆土、2～4：SC1覆土

第11図　土坑１

第３節　古代の遺構と遺物

掘立柱建物

掘立柱建物１（第 12，13 図）

遺構　調査区中央北寄りで検出された。建物の北東、北西、南西隅が撹乱によって失われている。現状、残存している柱掘方は 10 基である。確認できた柱堀方から建物の構造を判断すれば、梁行３間、桁行６間の側柱建物である。棟は東西方向に向いており、規模は東西 12.0m、南北は 4.7mで、南北軸は北から約６度東に振っている。柱堀方は基本的に方形で、一辺が約 0.8m～1.5mである。建物の南東隅と南西隅のみが、布堀状で２つの柱堀方が連結している。それぞれ、桁行方向、梁行方向に向かって掘られており、建物の柱間を調整するなどの目的をもっていたものかもしれない。柱間間隔は約 1.8～2.3mで、各柱間間隔はおおむね整っている。堀方底面に柱痕跡が認められるものがあり、これらからみると柱筋もきれいに通っていることが分かる。また、土層観察から、いくつかの柱堀方に柱を抜取った痕跡が確認でき、本建物廃棄時には柱抜取り作業がおこなわれたことがわかる。現状では、本建物に庇や雨落溝、建設の際の足場跡などの付随遺構は確認できなかった。

遺物　遺物は瓦片が３点出土した。いずれも平瓦で、凹面に布目痕跡、凸面に格子目タタキ痕跡が認められる。

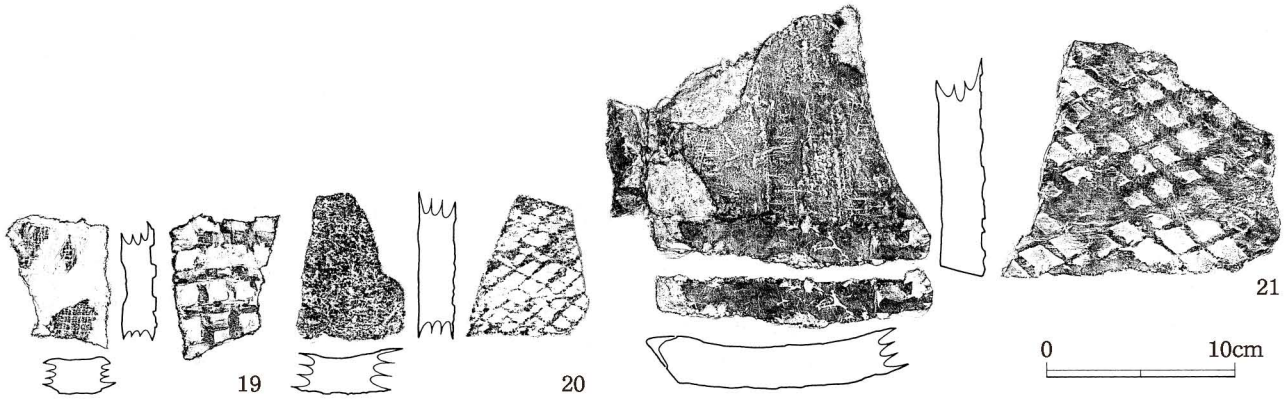
掘立柱建物２（第 14～34 図）

遺構　調査区中央南寄りで検出された。確認された柱堀方は７基、梁行２間、桁行５間分である。建物の南側が調査区外に及んでいるため建物の全体形を知ることはできないが、側柱建物であることは判断できる。棟が東西に向いており、規模は東西 14.4m、南北 5.9mで、軸方向は北から２度東に振っている。柱堀方は現状、直径約 0.9～1.3mの円形であるが、これらは柱抜取りの結果の形状と思われ、本来の柱堀方の形状は不明確である。ただし、堀方底面の形状も円形であることからすれば、柱堀方の形状は円形であったものと推測できる。柱間間隔は約 2.9mであり、全体的にほぼ均等で、計画的な設計の存在をうかがわせる。また、注目すべき点として、柱堀方底面付近に瓦が敷かれていることが挙げられる。これは柱の沈下防止を目的として敷設されたものと思われ、大小様々な平瓦、丸瓦片が用いられている。調査時には、瓦敷が確認された柱堀方は２基であったが、いずれの柱堀方にも柱抜取り後の埋土から瓦が検出されており、本来は全ての柱堀方に瓦が敷設されていたものと考えられる。土層を観察すると柱堀方にはいずれも柱抜取り痕跡があり、堀立柱建物１同様に建物廃棄時に柱抜取り作業がおこなわれたことがわかる。本建物の北辺および西辺には不整形の浅い溝状遺構が確認された。これらは本建物に付随する溝と考えられる。西辺のものは、両端が調査区外に出ており、規模不明である。北辺のものは長さ13.3m、幅最大で約3.2mで柱堀方から溝中心部までの距離は約3.5mである。２条の溝が切り合っていて掘り直しがなされたものと考えられる。加えて、北辺側の溝状遺構と柱堀方の位置関係に注目したい。溝状遺構の西端は建物北西隅の柱堀方より一つ東側の柱堀方までしか及んでおらず、建物角の柱堀方までは及んでいない。このことを踏まえて建物東隅を見ると、溝状遺構東端は現状で検出されている最も東側の柱堀方の付近までで収束しているから、この柱堀方より東にあと

１つ柱堀方があり、そこが建物角であると推定できる。したがって、本建物の桁行は６間であったと考えられる。梁行については不明である。その他の付随遺構は現状、確認できない。

遺物　遺物は、柱掘方および溝から出土している。柱掘方からは主に柱根固めとしての瓦が出土し、そのほかはわずかながら銅滓や板状の鉄製品と思しきものが見られた。土器は少なく、いずれも少片ばかりであった。一方、溝からは非常に多量の土器が出土した。出土状況では、土師器は坏が最も多く完形に近い灯明皿が多いこと、重ねられたような状況で出土していること、それに対して、須恵器、瓦は破片ばかりで完形に復元できるものなく、柱の根固めとしての瓦の利用などと合わせて、他所からの二次的に搬入されたものと見られ、注目できる。

第 18 図から第 26 図は北側溝出土遺物である。22 から 53 は土師器坏である。底部内面がほぼ平らで、底部と体部の接合部が膨らまないもの、底部内面がやや凹凸を持ち、底部と体部の接合部の厚みが増しているもの、底部内面が丸みを帯び、底部と体部の接合部の厚みが増しているもの、高台を意識した底部形状になっているものがある。体部から口縁部にかけての形状は、直線的に立ち上がるもの、わずかに外反するもの、わずかに内湾するものが見られる。底部形状と体部・口縁部形状との間に厳密な相関関係は見出せない。灯明皿として使用され、内外面に煤が付着しているものが多くみられる。54 から 62 は土師器の高台付坏である。高台の形状は先端部が平坦なもの、丸くおさめられているもの、やや尖り気味になっているものがある。57 から 59 は高台内面に放射状圧痕が見られる。61・62 は器厚が非常に厚く、低い高台が取り付けられている。63・64 は焼塩土器である。手捏ねによって成形されており、内面には布目痕跡が残っている。65・66 は須恵器坏蓋である。67 から 69 は須恵器高台付坏である。67・68 は台形状の坏部で低い高台が取り付けられている。69 は三角形状の坏部形状でやや高い高台が取り付けられている。70・71 は須恵器甕である。70 は外面に格子目タタキ、内面に同心円当具痕が見られる。71 は外面に格子目タタキ、内面に車輪文当具痕が認められる。72 は土師器皿である。器高が低く、体部から口縁部は外反している。73 は土師器埦である。口縁部は内湾し、厚みがある。74 は器種不明土師器である。75 はフイゴ羽口である。強く被熱しており、変色している。76 は土師器甕あるいは壺である。器壁が厚く、外面にタタキ目が、内面に同心円当具痕が認められる。77・78 は軒丸瓦片である。77 は瓦当面が残り、素弁八葉蓮華文が確認できる。瓦当面外縁、瓦当裏面外縁が突出する形態で、丸瓦との接合部は折損している。78 は瓦当面外縁の突帯片である。瓦当面か



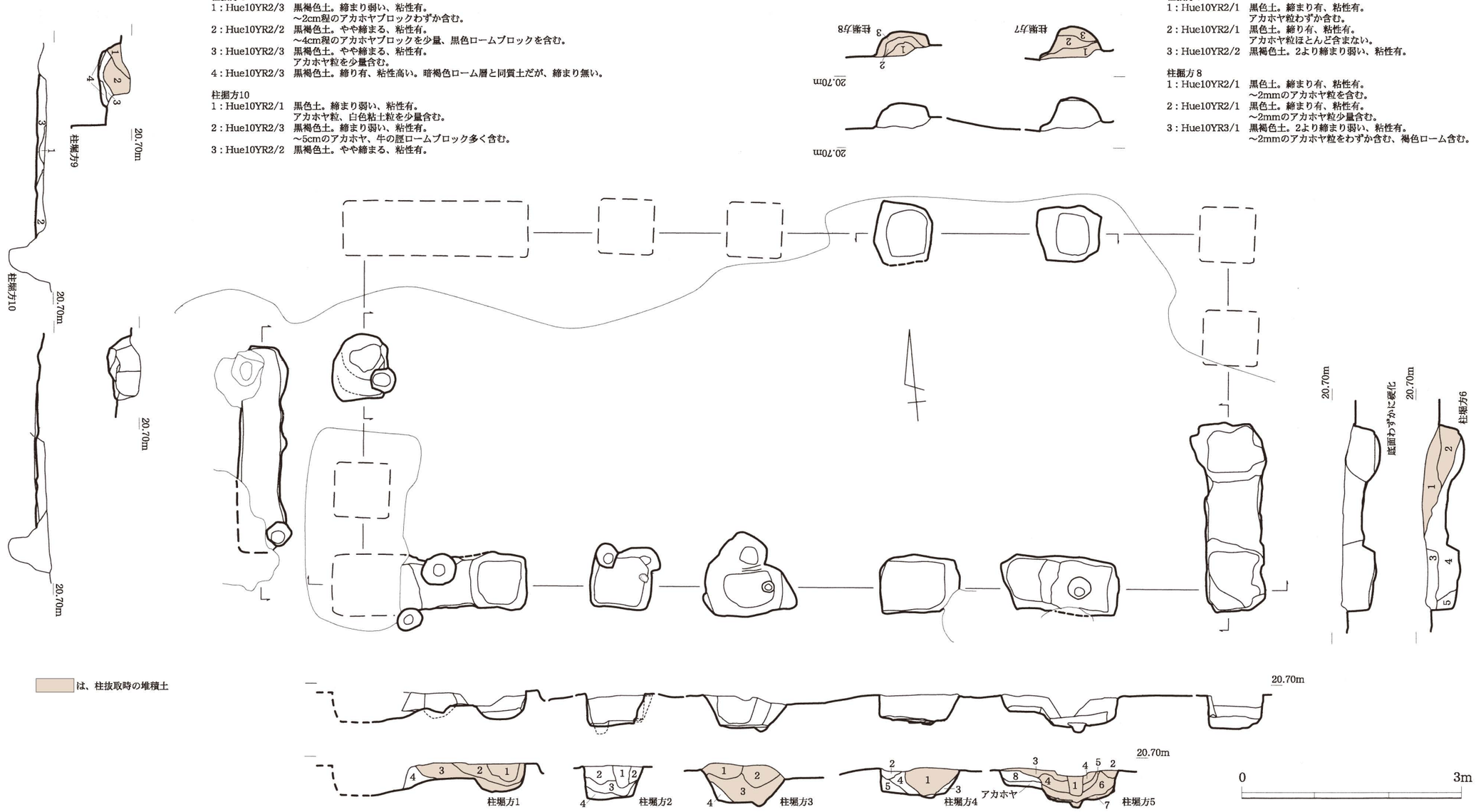
第12図　掘立柱建物１出土遺物

柱掘方9
1：Hue10YR2/3　黒褐色土。締まり弱い、粘性有。
　　～2cm程のアカホヤブロックわずか含む。
2：Hue10YR2/2　黒褐色土。やや締まる、粘性有。
　　～4cm程のアカホヤブロックを少量、黒色ロームブロックを含む。
3：Hue10YR2/3　黒褐色土。やや締まる、粘性有。
　　アカホヤ粒を少量含む。
4：Hue10YR2/3　黒褐色土。締り有、粘性高い。暗褐色ローム層と同質土だが、締まり無い。

柱掘方10
1：Hue10YR2/1　黒色土。締まり弱い、粘性有。
　　アカホヤ粒、白色粘土粒を少量含む。
2：Hue10YR2/3　黒褐色土。締まり弱い、粘性有。
　　～5cmのアカホヤ、牛の脛ロームブロック多く含む。
3：Hue10YR2/2　黒褐色土。やや締まる、粘性有。

柱掘方7
1：Hue10YR2/1　黒色土。締まり有、粘性有。
　　アカホヤ粒わずか含む。
2：Hue10YR2/1　黒色土。締り有、粘性有。
　　アカホヤ粒ほとんど含まない。
3：Hue10YR2/2　黒褐色土。2より締まり弱い、粘性有。

柱掘方8
1：Hue10YR2/1　黒色土。締まり有、粘性有。
　　～2mmのアカホヤ粒を含む。
2：Hue10YR2/1　黒色土。締まり有、粘性有。
　　～2mmのアカホヤ粒少量含む。
3：Hue10YR3/1　黒褐色土。2より締まり弱い、粘性有。
　　～2mmのアカホヤ粒をわずか含む、褐色ローム含む。



柱掘方1
1：Hue10YR2/1　黒色土。やや締まる、粘性有。
　　土器、アカホヤ、白色粘土の粒を多く含む。
2：Hue10YR2/1　黒色土。やや締まる、粘性有。
　　アカホヤ、牛の脛ローム粒を含む
3：Hue10YR2/1　黒色土。上層より締まる、粘性有。
　　アカホヤ粒を少量、ブロックをわずか含む。
4：Hue10YR2/2　黒褐色土。締まり弱い、粘性有。
　　～8cm程のアカホヤブロックを含む。

柱掘方2
1：Hue10YR2/1　黒色土。やや締まる、粘性有。
　　アカホヤ、白色粘土粒を含む。
2：Hue10YR2/1　黒色土。やや締まる、粘性有。
　　アカホヤ粒をわずか含む。
3：Hue10YR2/2　黒褐色土。やや締まる、粘性有。
　　～1cmのアカホヤブロックを少量含む。
4：Hue10YR2/2　黒褐色土。やや締まる、粘性有。
　　アカホヤブロックをわずか含む。

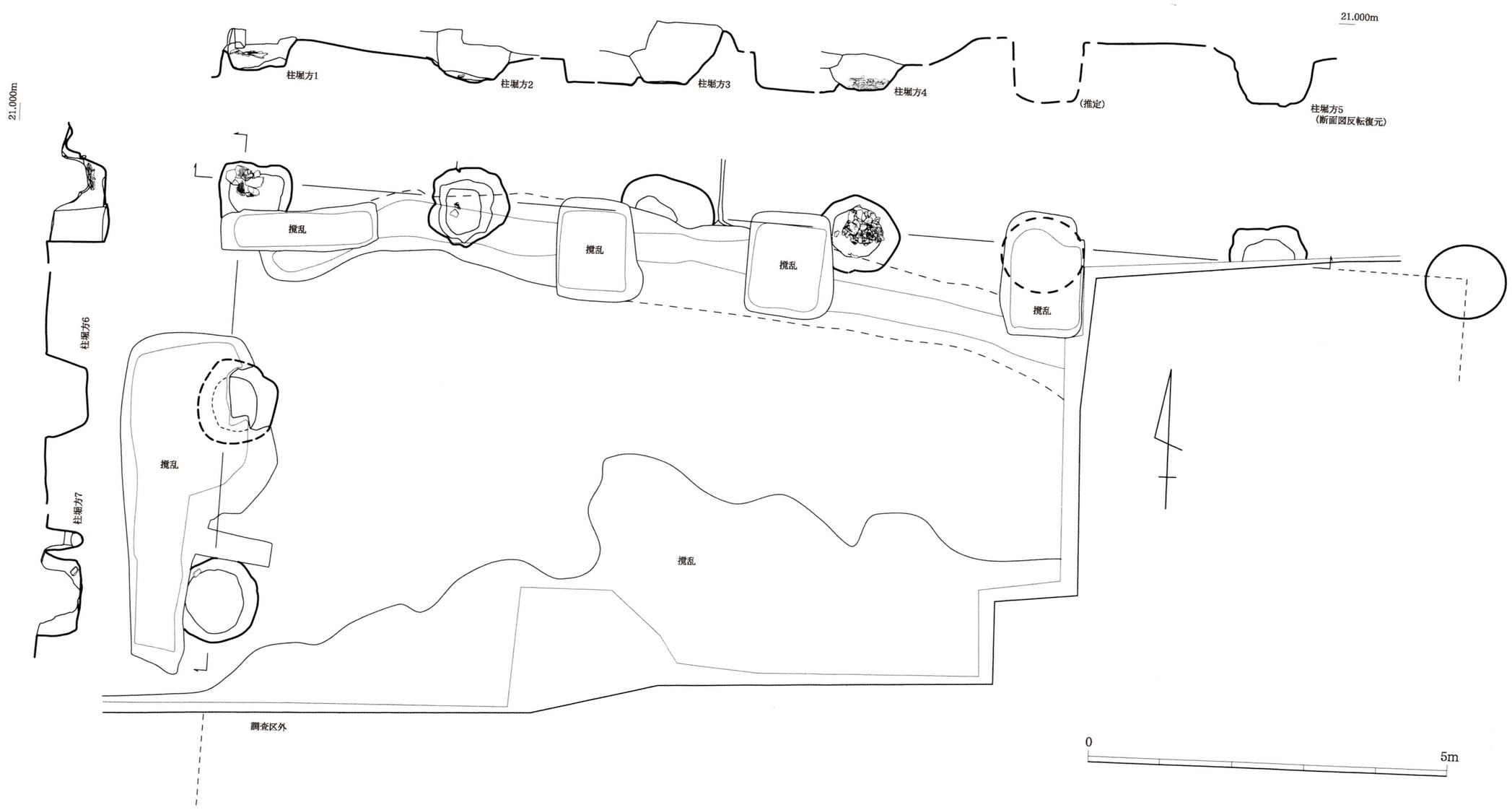
柱掘方3
1：Hue10YR2/2　黒褐色土。やや締まる、粘性有。
　　アカホヤ粒、土器粒を多く含む。
2：Hue10YR2/1　黒色土。やや締まる、粘性有。
　　アカホヤ粒、土器粒、白色ローム粒を多く含む。
3：Hue10YR2/1　黒色土。やや締まる、粘性有。
　　～2cm程のアカホヤ、牛の脛ローム粒を含む。
4：Hue10YR2/3　黒褐色土。上層より締り無、粘性有。
　　～2cmのアカホヤブロック、褐色ロームブロック含む。

柱掘方4
1：Hue10YR2/2　黒褐色土。締まり無、粘性有。
　　アカホヤブロックを多量に含む。
2：Hue10YR2/1　黒色土。締まり無、粘性有。
　　アカホヤブロック・粒をまばらに含む。
3：Hue10YR2/1　黒色土。締まり無、粘性有。
　　アカホヤブロックをわずかに含む。
4：Hue10YR2/2　黒褐色土。締まり無、粘性有。
　　～1cmのアカホヤブロックをまばらに含む。
5：Hue10YR2/2　黒褐色土。締まり無、粘性有。
　　5cm程のアカホヤブロックが含まれる。

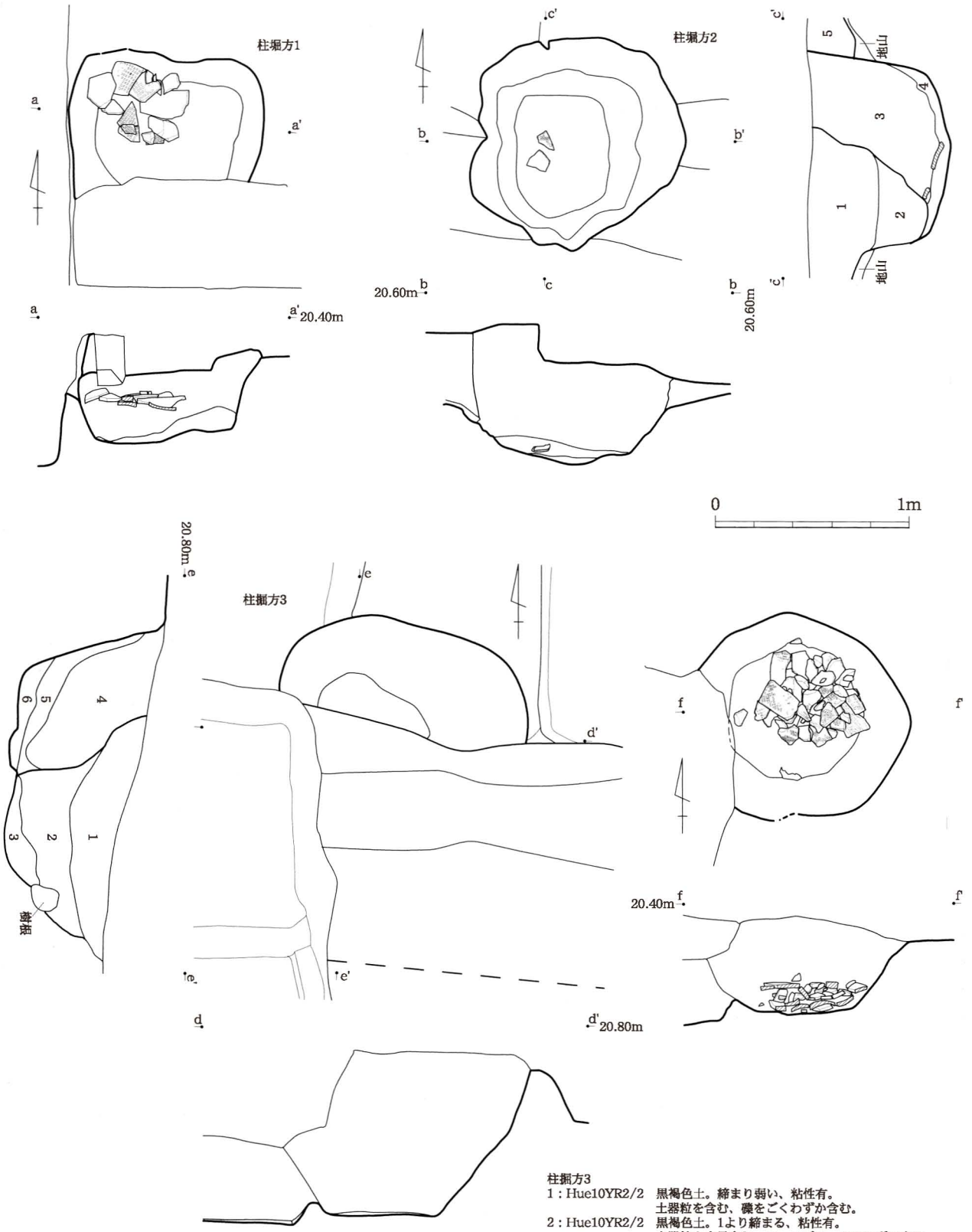
柱掘方5
1：Hue10YR2/1　黒色土。締まり弱い、粘性有。
　　白色粘土粒を含む。
2：Hue10UYR2/1　黒色土。締まり弱い、粘性有。
　　アカホヤ、土器、白色粘土の粒を多く含む。
3：Hue10YR2/1　黒色土。締まり弱い、粘性有。
4：Hue10YR2/1　黒色土。締まり弱い、粘性有。
　　～3cmのアカホヤブロックを少量含む。
5：Hue10YR2/2　黒褐色土。締まり弱い、粘性有。
　　6より多くのアカホヤ粒含む。
6：Hue10YR2/2　黒褐色土。締まり弱い、粘性有。
　　アカホヤ粒をごくわずか含む。
7：Hue10YR3/2　黒褐色土。締り有、粘性有。
　　～1cm程のアカホヤブロック少量含む。
8：Hue10YR2/2　黒褐色土。締り有、粘性有。
　　～5cmのアカホヤブロックを多く含む。

柱掘方6
1：Hue10YR2/1　黒色土。締まり弱い、粘性有。
　　1～5cmのアカホヤ含む。白色粘土粒含む。
2：Hue10YR2/1　黒色土。締まり弱い、粘性有。
　　アカホヤ粒、白色粘土粒わずか含む。
3：Hue10YR2/1　黒色土。やや締まる、粘性有。
　　1～5cmのアカホヤ粒を含む。
4：Hue10YR2/2　黒褐色土。やや締まる、粘性有。
　　～5cmのアカホヤブロックを多量に含む。
5：Hue10YR2/2　黒褐色土。4と同質土だが、やや締まりが強い。

第13図　掘立柱建物１



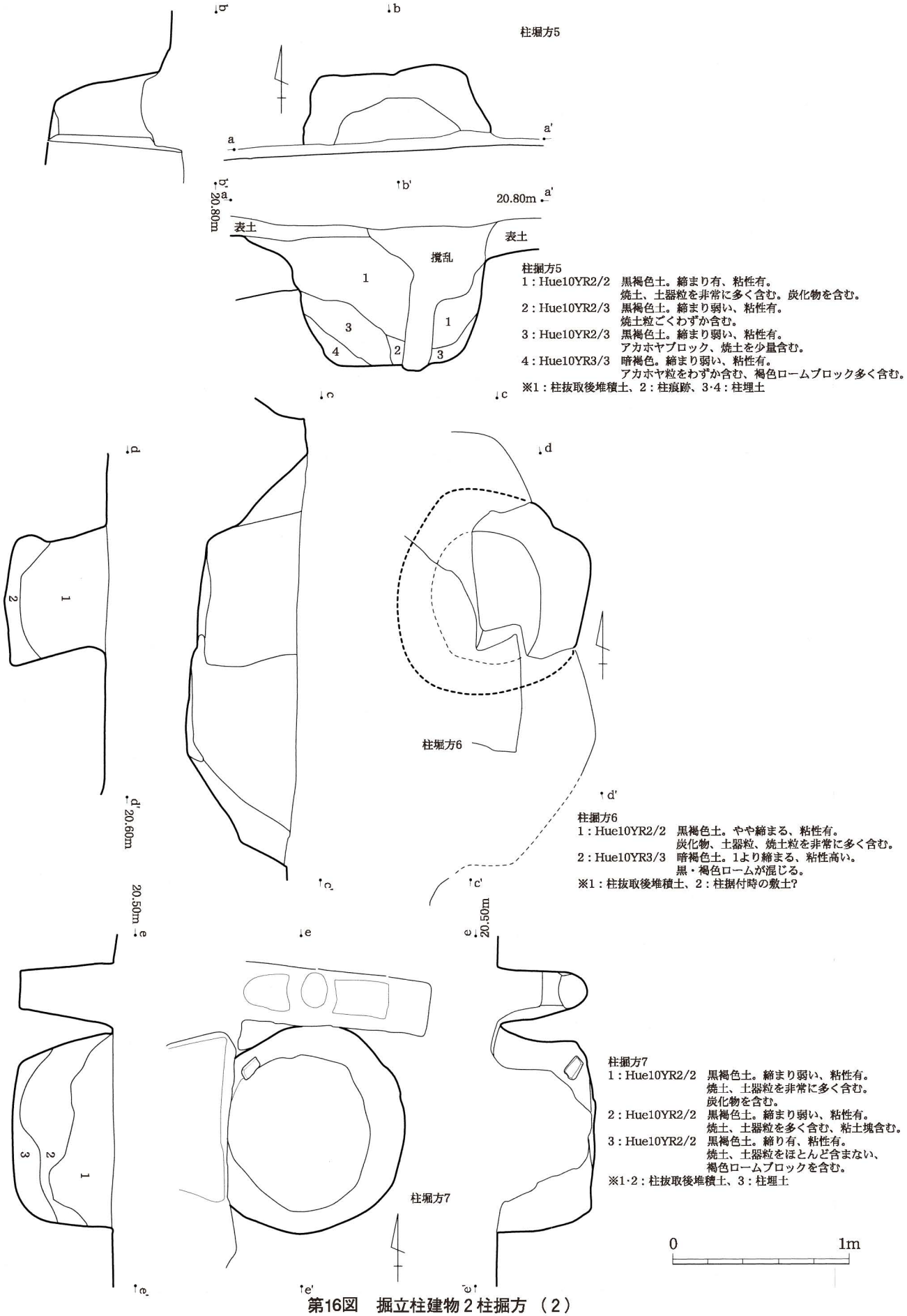
第14図　掘立柱建物２柱掘方部分



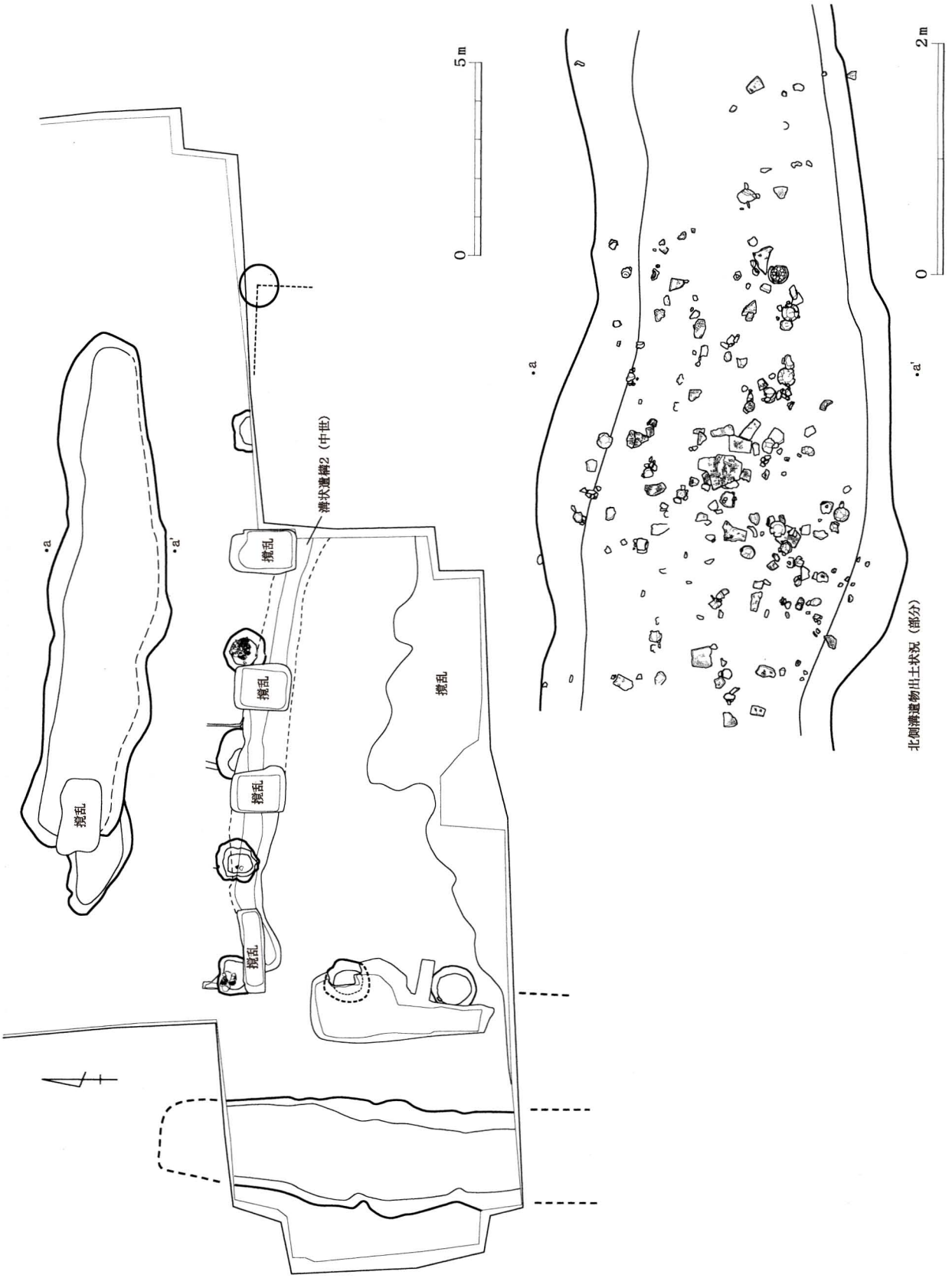
柱掘方2
1：Hue10YR2/2　黒褐色土。締まり弱い、粘性有。焼土粒、土器粒を少量含む。
2：Hue10YR2/1　黒色土。締まり弱い、粘性有。焼土、土器粒を少量含む。
3：Hue10YR2/1　黒色土。やや締まる、粘性有。焼土粒、土器粒を多量に含む。
4：Hue10YR3/3　暗褐色土。締まり弱い、粘性有。褐色ロームブロック多く含む。
5：Hue10YR2/2　黒褐色土。やや締まる、粘性有。土器片を少量含む。
※1、2：溝状遺構2覆土、3、4：柱掘方覆土、5：溝状遺構1覆土

柱掘方3
1：Hue10YR2/2　黒褐色土。締まり弱い、粘性有。
土器粒を含む、礫をごくわずか含む。
2：Hue10YR2/2　黒褐色土。1より締まる、粘性有。
土器粒を少量含む。ロームブロックをわずか含む。
3：Hue10YR3/3　暗褐色土。締まり弱い、粘性高い。
土器粒ごくわずか含む、褐色ローム多く含む。
4：Hue10YR2/2　黒褐色土。やや締まる、粘性有。
土器、瓦片含む。焼土粒を多量に含む。
5：Hue10YR2/2　黒褐色土。締まり有、粘性有。
土器粒、ロームブロックを含む。
6：Hue10YR2/2　黒褐色土。上層とほぼ同質土であるが、締まり強い。
※1～3：溝状遺構2覆土、4～6柱掘方覆土

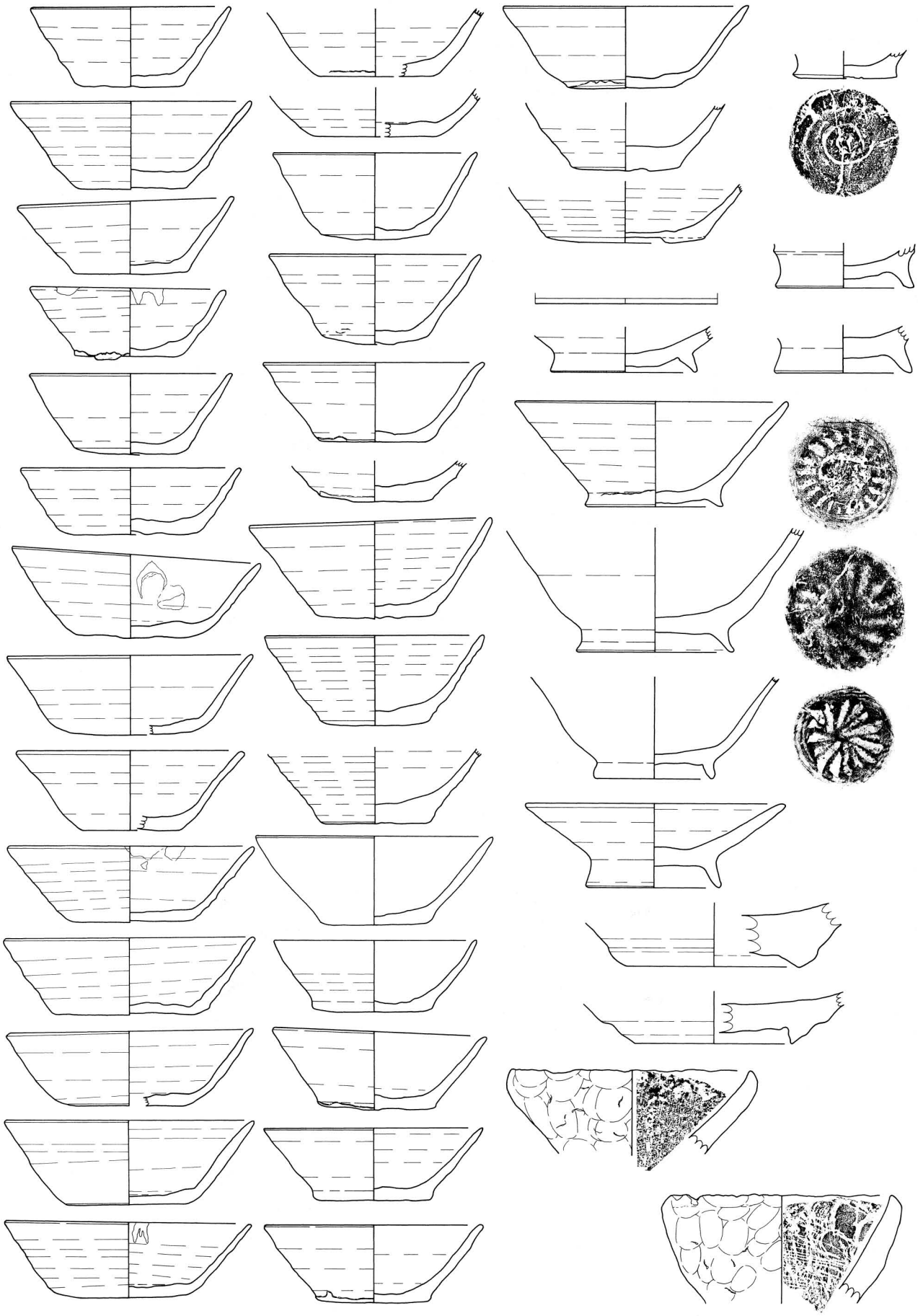
第15図　掘立柱建物２柱掘方（１）

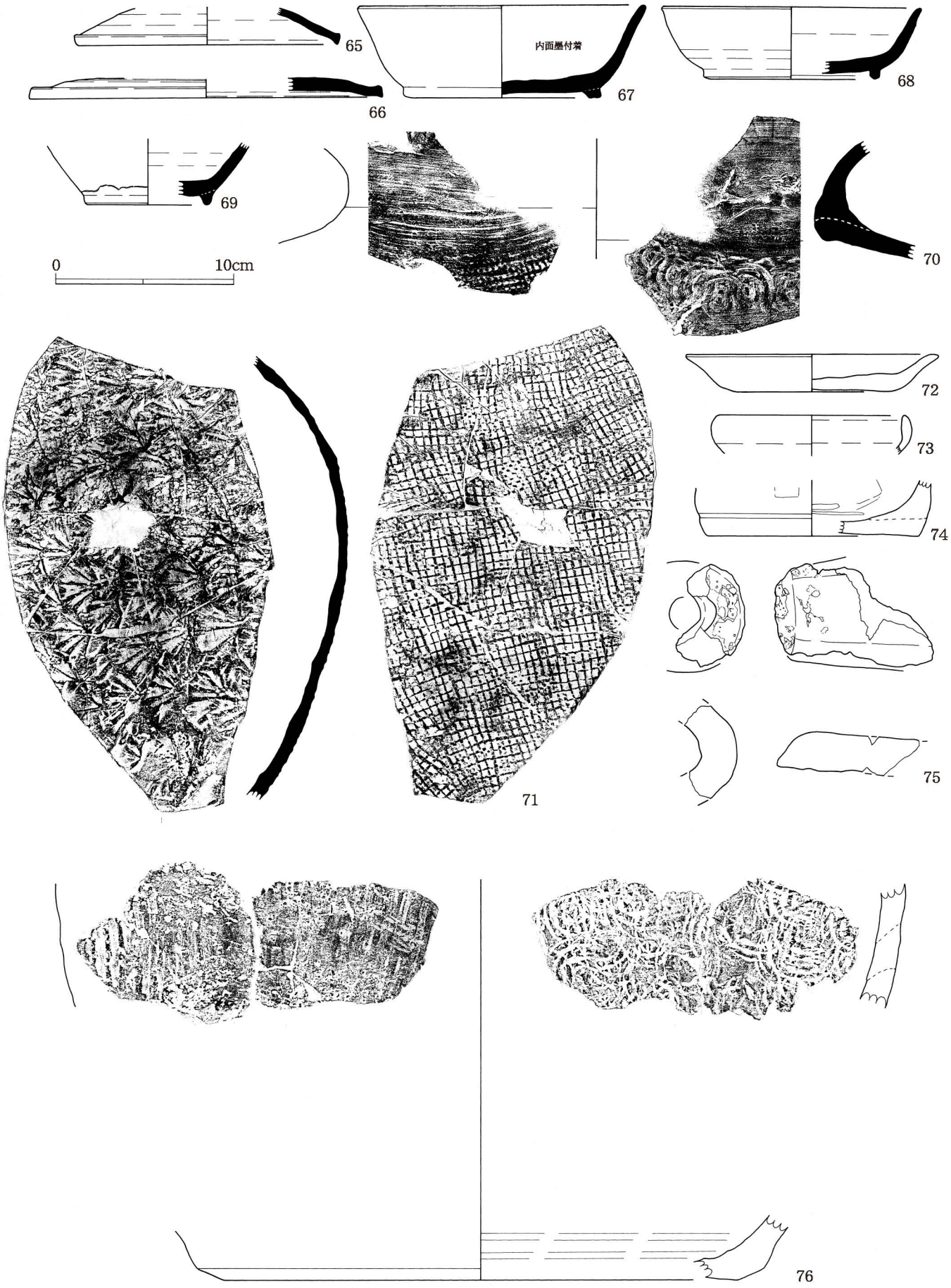


第16図　掘立柱建物２柱掘方（２）

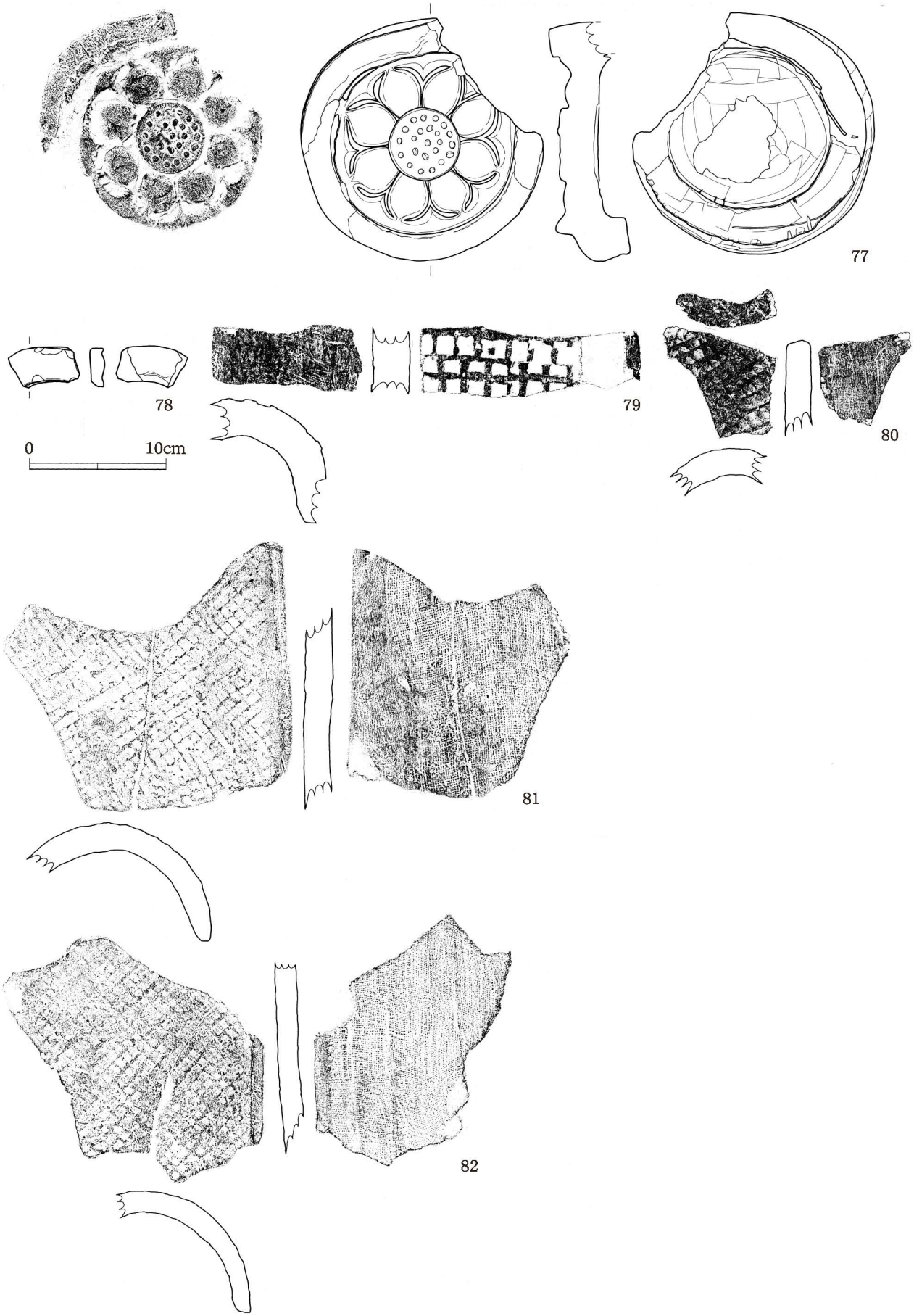


第17図　掘立柱建物２・北側溝遺物出土状況

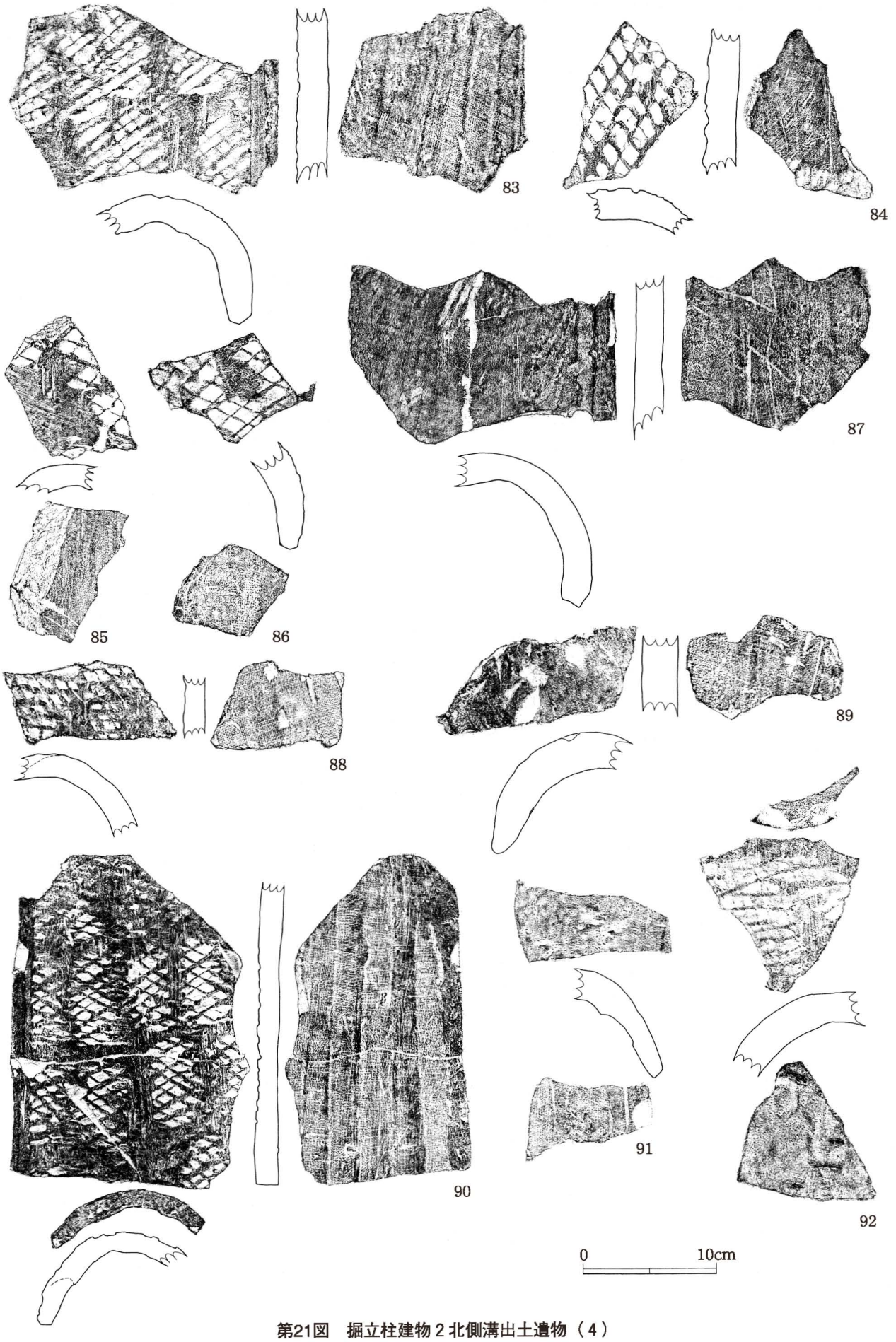




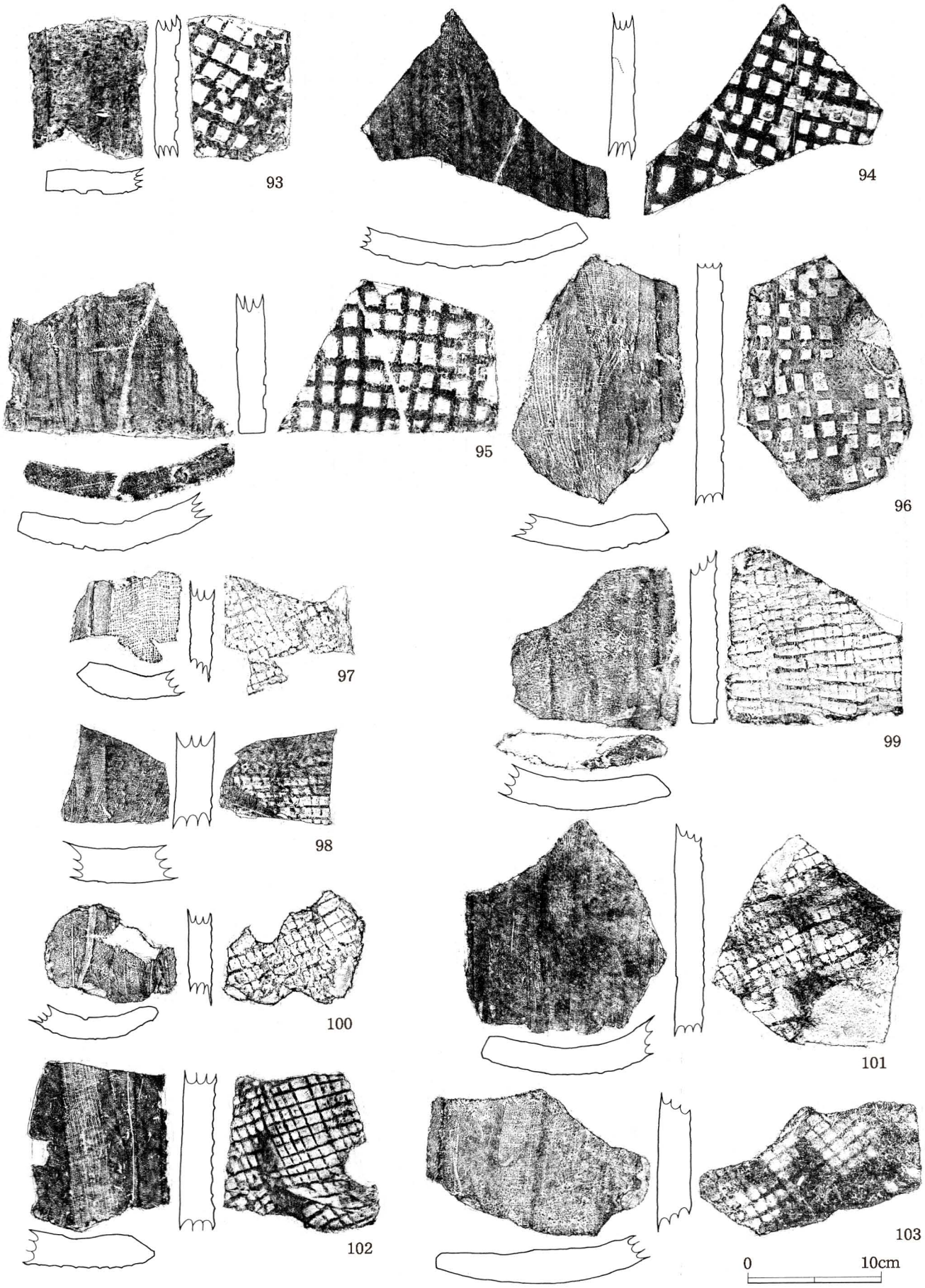
第19図　掘立柱建物２北側溝出土遺物（２）



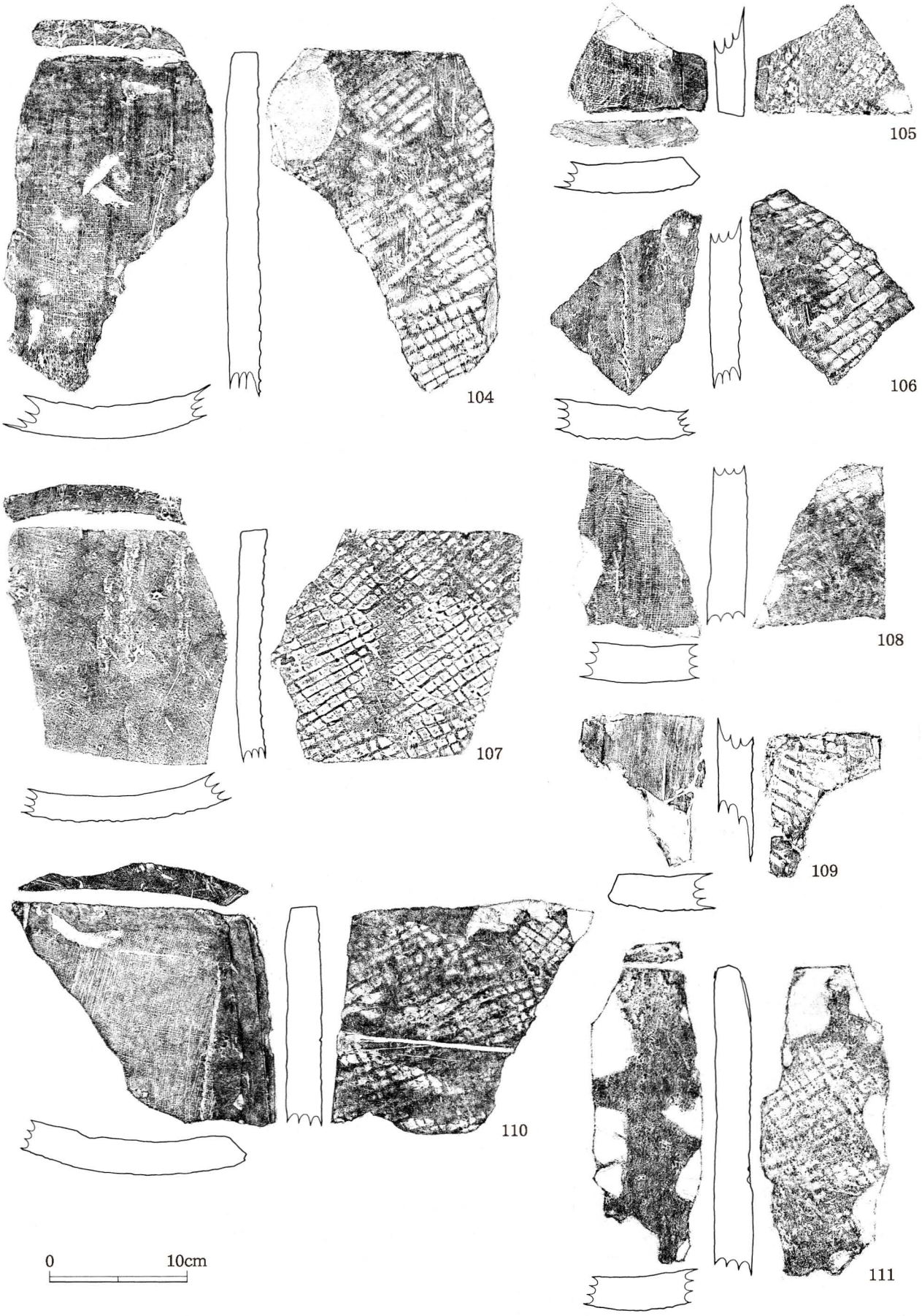
第20図　掘立柱建物２北側溝出土遺物（３）



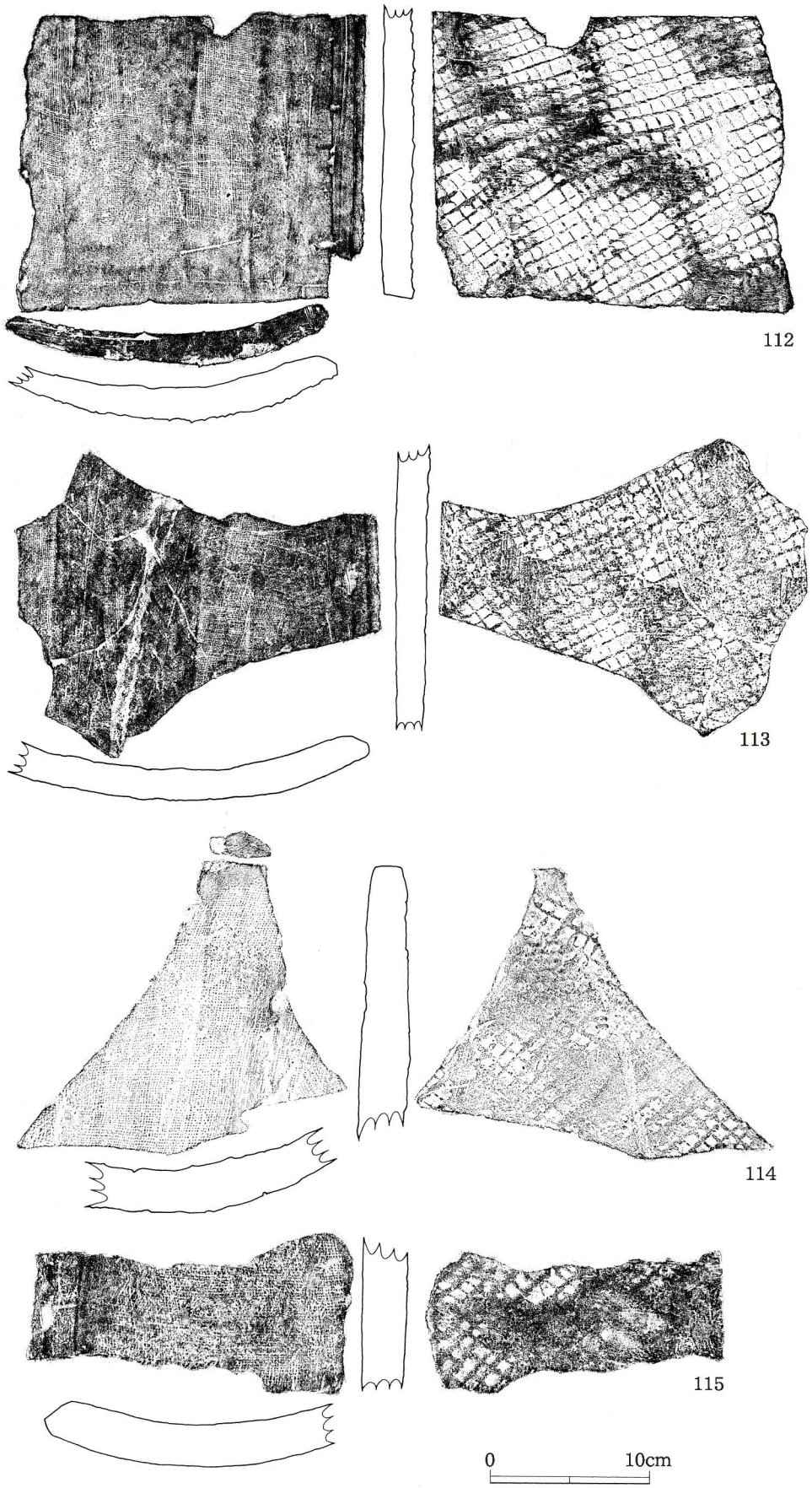
第21図　掘立柱建物２北側溝出土遺物（４）



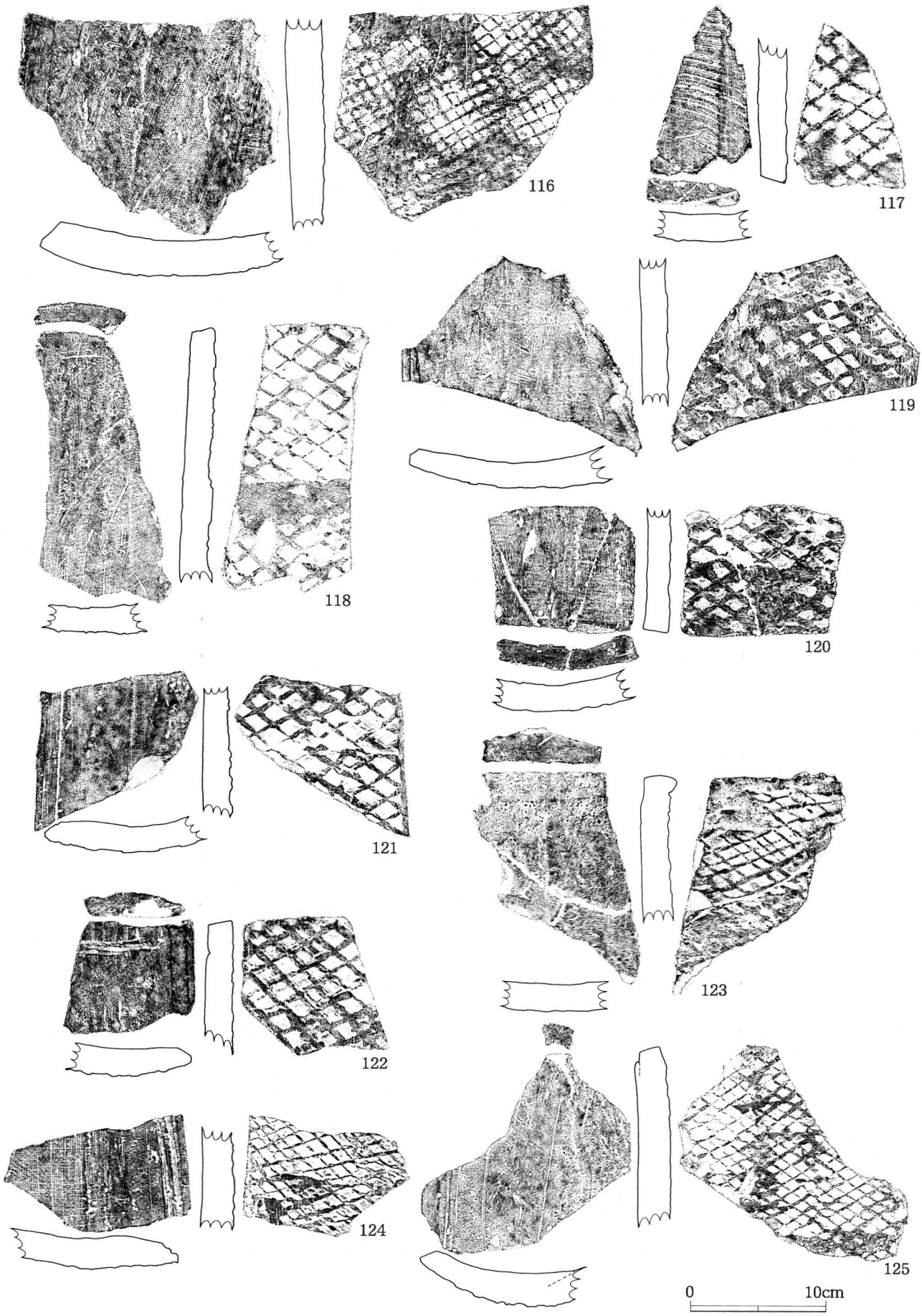
第22図　掘立柱建物２北側溝出土遺物（５）



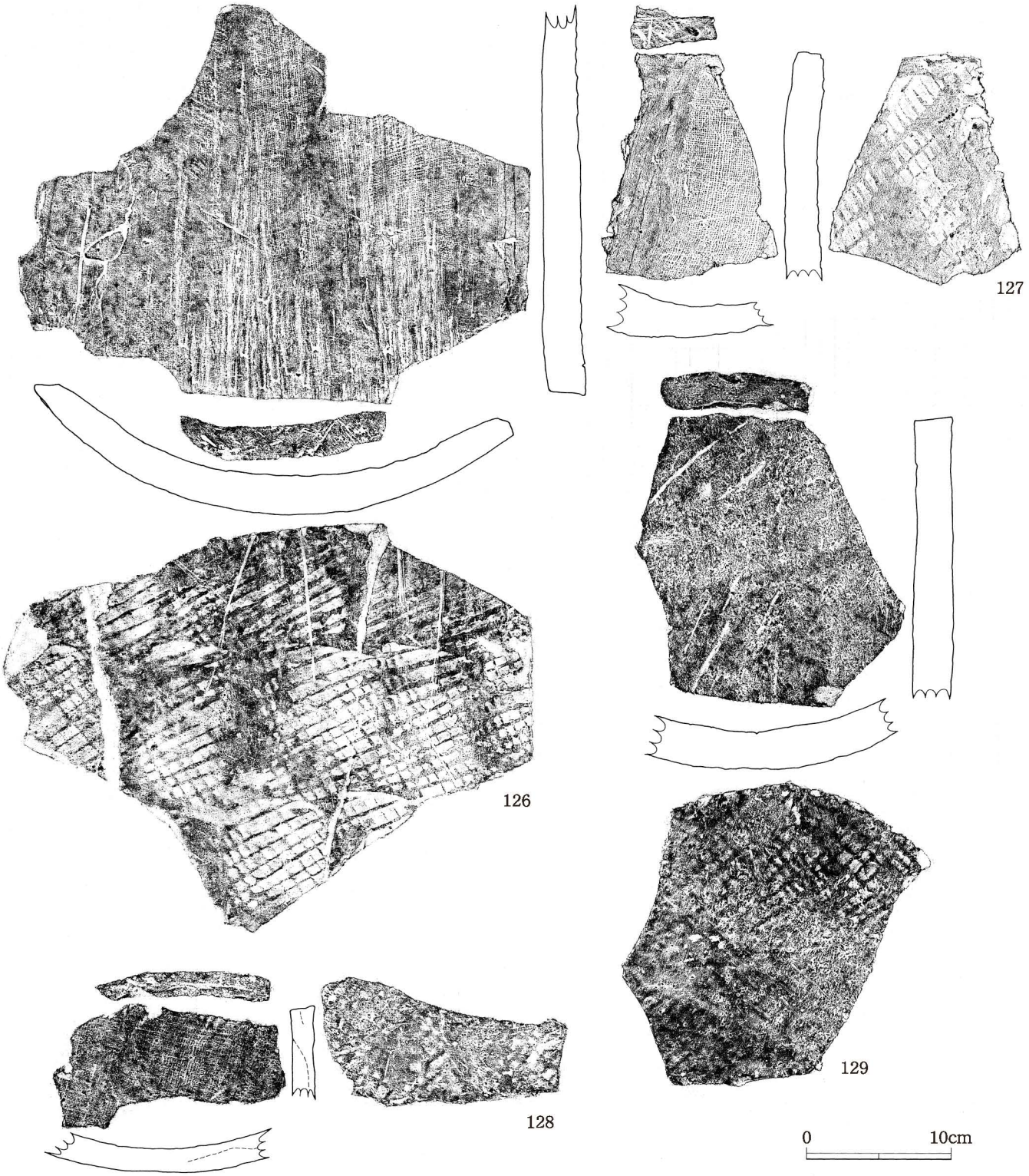
第23図　掘立柱建物２北側溝出土遺物（６）



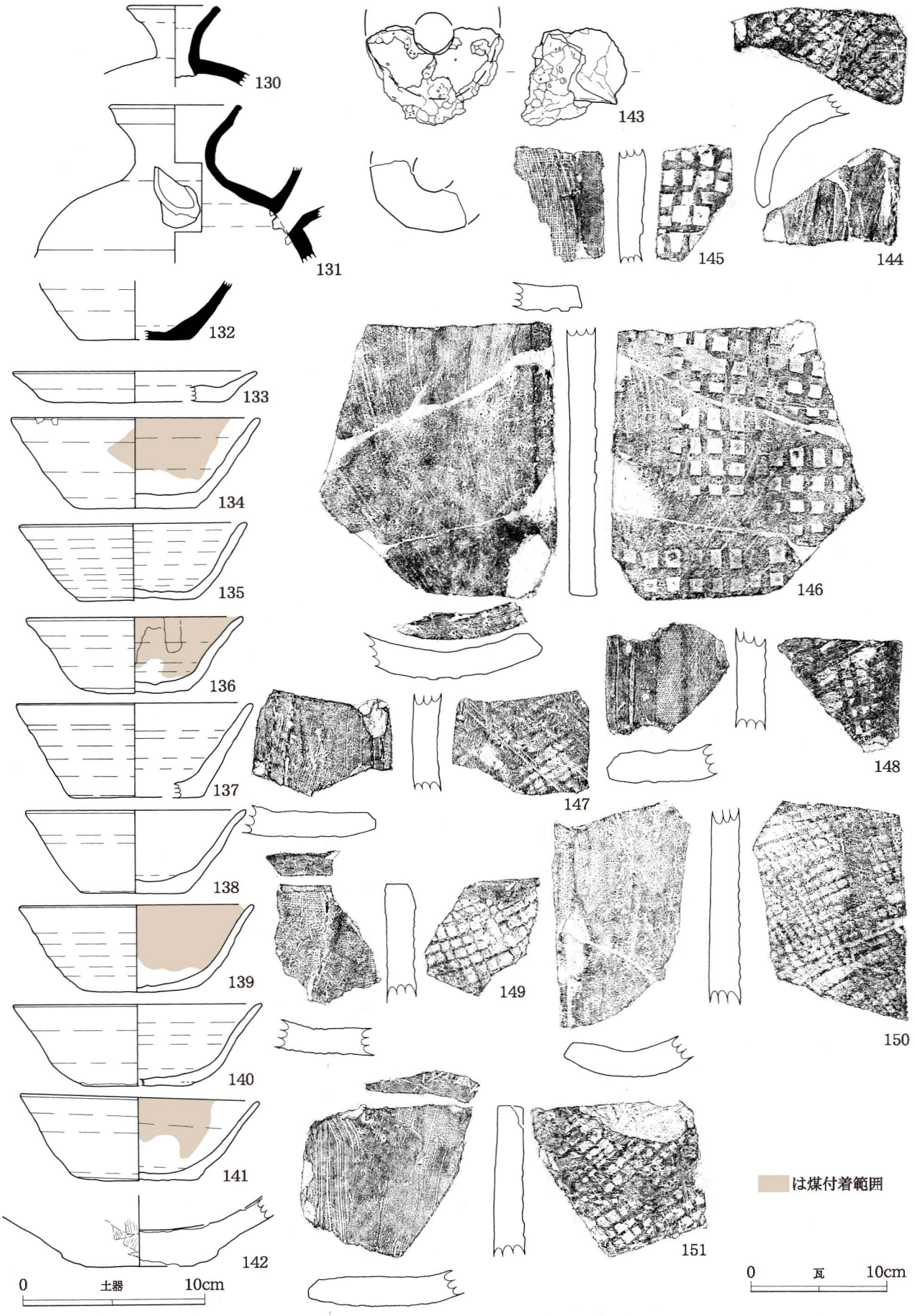
第24図　掘立柱建物２北側溝出土遺物（７）



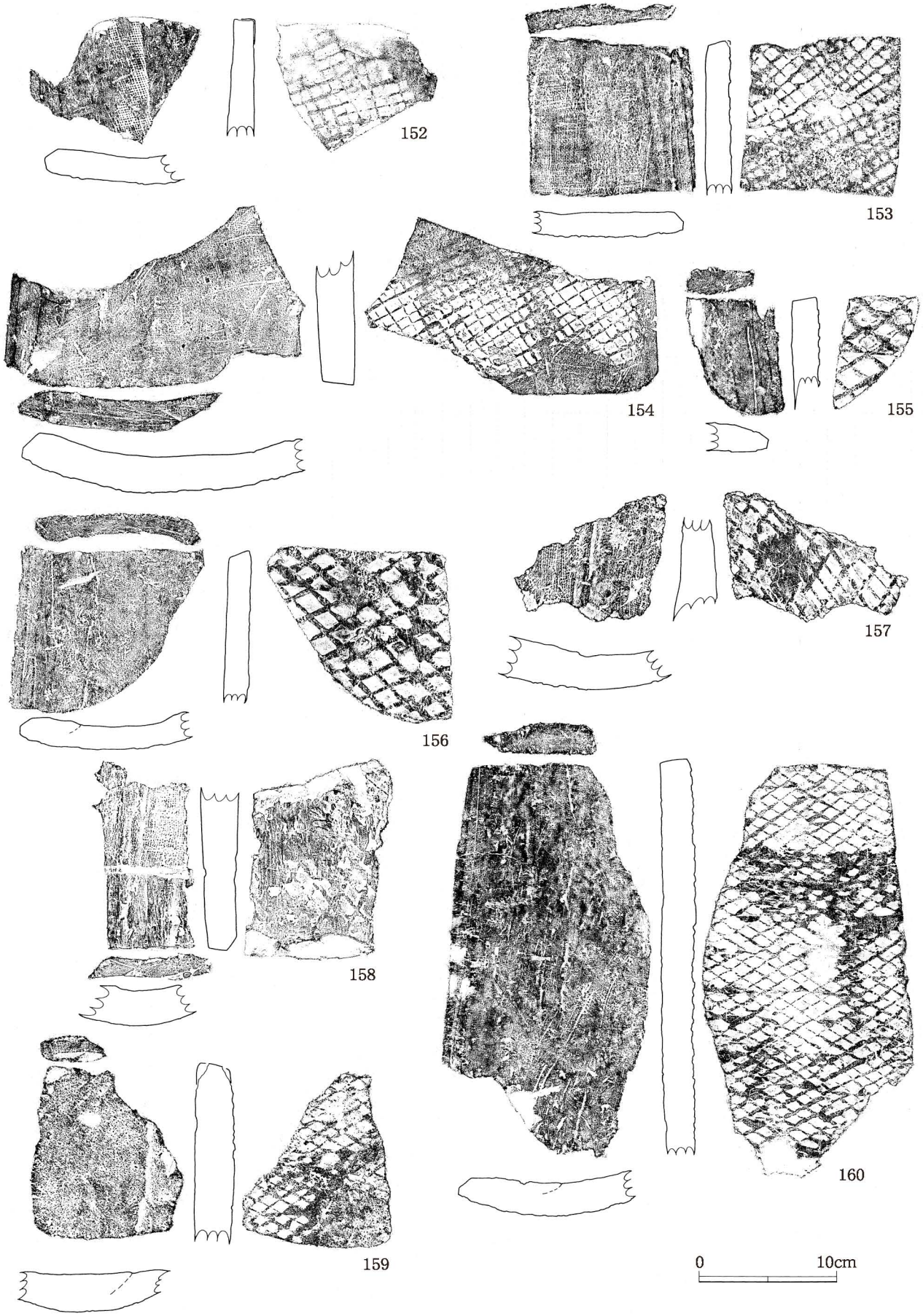
第25図　掘立柱建物２北側溝出土遺物（８）



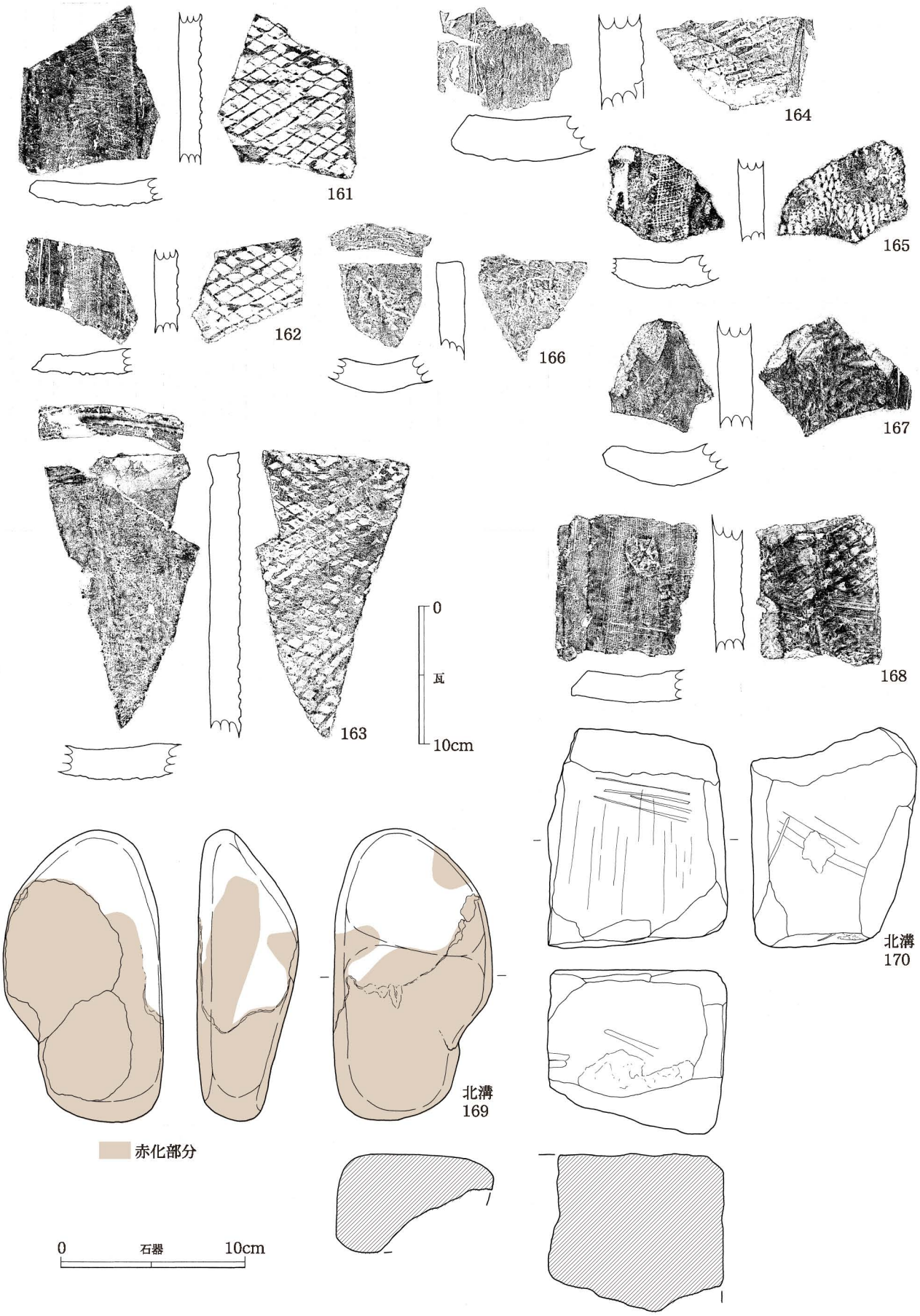
第26図　掘立柱建物２北側溝出土遺物（９）



第27図　掘立柱建物２西側溝出土遺物（１）



第28図　掘立柱建物２西側溝出土遺物（２）



第29図　掘立柱建物２西側溝出土遺物（３）、掘立柱建物２出土石器